

リリカル For FFXI

玄狐

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

とあるゲーマーがFFXIの能力を手にしてリリカルな世界に転生するだけのお話。のはずだったんですけどね…。

なお、更新に関しては皆様の温かい評価、コメントを燃料とさせていただいております。

以前、某所にて投稿しておりましたが投稿できなくなつたため、こちらに編集のちに投稿させていただいております。

目次

無印前

生まれてみた！ | 1

でたなHNMM！つてあれ？ | 10

家庭の事情とはいえなあ？ | 17

少女の掌 | 24

褒める。ただそれだけなのにどれだけ

難しいか。 | 32

善行とは——？ | 42

見ユル先ハ未ダニ遠ク | 52

試合に勝って、勝負に負ける。

63

無印期

渴望 | 75

魔王、目覚める。 | 84

魔を統べ、闇に舞う | 96

不重の想手 | 104

積み重ねを省みよ、汝らが咎は？

114

水の耀きに願いを | 122

カニタンク！出撃ス！ | 間劇 |

126

厭う意思、無ければ水は低きに流れり

| 135

無印前

生まれてみた！

最初は、普通の人生だと思っていた。

何の因果かは分からず仕舞いだったが、モーグリという使い魔というかペットができて、不思議な力や技術が身についた『だけ』だと思っていた。

確かに地獄じみた経験をさせられたが手にしてみれば、それ以上の価値のあるものとわかる。

尤も、小学生1年の身でそんなことが起きてもどうしようもないのだが、ありがたいことに我が家は父子家庭だ。

この体になってからの記憶をたどると4歳ぐらいの時に母親のほうで浮気をして発覚、まあ、子供ができた、と言っても父親と子づくりもろくすこしないて出来るわけではないし、そもそも、父と母ではできない血液型だったというから救えない。

そんなこんなで俺には母親がない。

前世で散々迷惑をかけられた両親は兎も角、忙しいのにもかかわらず細かな時間を見つけてはかまってくれる父親には感謝をしても到底足りぬものではない。

幸にも不幸にも父親がいないため、モーグリの存在を隠すのには苦勞しなかったし、なんとあのなぞ生物、一日バナナ一本程度で十分らしい。

まして、父親が部屋に入っても隠れてくれるというからありがたいことこの上ない。そんな、使い魔?にも恵まれ新たな人生をやり直せるのはこの上ない幸せなのだろう。

さしあたって、今の目標とするなら、前世の願いである結婚して幸せな老後を目指すつつ、父性愛を注いでくれる父親と類稀なる忠誠というか愛情?を注いでくれるモーグりに報いいること。である。

しかし、だ。

懸念があつた。

それも、核地雷級のものだ。

名前が海鳴市という、この土地で入る小学校は風芽丘小学校…。

悩んだ。

成績では聖祥も全く問題ないと言う幼稚園の先生と強く勧める父親に頭を下げ風芽丘小学校へと「友達と離れたくない」とウソ泣きまでして入学した。

なぜか?

簡単な理由だ。

仮にこれがとらハだった場合で、尚且つ登場キャラクターのいずれかに該当したとしても友好がなければ問題ない。

少なくとも進んで友好を温める主人公ではないし、主人公でなければなあなあで充分対処できる。

だが、『なのは』は違う。

ぶつかり合いながらも絆を深め、どんなことがあっても相手を許す懐の深さを持つ少女。と彼女を評価できる。

裏側としてみてしまえば、何が何でも自分の意見を貫き通すエゴイストと判断しても何らおかしくはない。

それ故に不味いのだ。

彼女はどんなことがあっても『友達』という関係を作りたがる。

だけなら良い。

前者と同じく適当な関係を継続できればいい、どうせ中等部なれば離れるのだ。

だが、FFのジョブには『MP』が存在する。

検証は不可能なのだがこれがリンカーコアとなる場合、A'sで間違いなく狙われることになり、無印であつてもユーノの念話や感知能力により有耶無耶のうちに関わりを持たされることになるのだ。

しかも、拒否をすればただ強く食いつく……どんな罰ゲームかと言いたくもなるのだが、拒否云々の前にそんな状況を作らせなければいいのだ。

頼み辛い条件の相手となることでユーノの交渉を跳ね除け、なのはのすつぽん並みの食いつきから逃げる。

条件を整えるには聖翔などよりも風芽丘のほうが遥かに優れているのだ!

フハハハハッ!

今度こそ、人生をエンジョイさせてもらおう、条件はクリアーだ!

……そう思っていた時が私にもありました。

ネタじゃないのに本当にそういうなんて思わなかった。

だってさ……。

同級生と一緒にいたくない戦闘生命体と6年一緒だぜ?

信じられるか?

6クラスあるのにずっと一緒だぞ?

中学は言っても一緒って呪いか? 呪詛状態か?

虐めか? 虐めなのか?

そんな眩きを漏らしても罰は当たるまい。

許可が下りるのであれば一日中愚痴を呟ける自信が俺にはある。

さて、今回割り振られた案件は今までで一番ヘヴィなものだ。

このミッションは、こちらの最重要対象〈Takamati Nanhah〉がもつともPOPしやすいエリアであるTakamati homeに行かなくてはならない。

何せ、あの化け物はトリガーも何もなしにPOPする上に、ヘイトリストに載ったら最後、ほかのエリアにいたとしても勝手に沸いて出てくるトンでも仕様だ。

あんな化け物作った運営がいるとするなら小一時間問い詰めなければならないのは、決定的に明らかで、目をつけられれば最後、如何に力カツとバックステッポしても無理だろう。

「さて、信濃。そろそろ現実に戻ってこのプリントを届けてくれ」

あまりのショックに現実逃避していた俺に、クエの発注者である織部 忠一教諭（34）見合い失敗回数更新中。が声をかけてきた。

ああ、信濃と言うのは俺の名字である。

信濃 信志、これが俺の今回の名前であるのだが、今回は置いておく。

そしてこの、プリントの配達を不幸にも承る原因というのが、あの魔王の城が非常に残念なことに近所なのだ。

「あのような信濃、お前がなんでそんなに高町と接触したくないかは知らん。現に小学校でも相当、手を焼いたと連絡を受けている」

ほほう、まあ、相談などは尤もなので何も言い返す気はしない、仮に避ける理由を言っても頭のおかしい電波君にされる。それは回避したい。

「いじめはない、これは、起きないようにお前自身が気を使っていたのも知っている。だが、協調性というのには必要以上に大切なものなのだ」

おお、織部が教師っぽいことを言っている！

なぜ、見合い現場になるとドモって何も言えなくなるのだろうか？非常にもつたいない気がするが…。

「じゃかしいー！ったく、いいか？何があったか知らないし、聞かん、がもう少し打ち解けろ」

思考が発言となって漏れていたらしい、突っ込みを受け反省はするが後悔はしない。が、入学して2か月でこうも動かれるということは別のアクションがすでにあつたためと考えるおかしくない。とみるべきか？

例えば、相手のほうから相談を受けた。ないし、受けているのを知っている。いや、それにしては動き方が若干強硬すぎると思うのだが？

なら、続く場合、何らかのアクションを起こさざるを得ないところまで来ているため、

今回の件を利用して強硬的にでも解決しようとしている。とか?」

「途中から、声に出していたが、その通りだよ」

「おや、凶星とは面白くない…が、その答えは面白くありませんね、先生」

思考をまとめるうえでよくやる癖はあるのだが声に出していたあたり、何とも痛い思考の持ち主と思われかねないので自重したいのだが、織部の回答はそれを許してくれそうにもなかった。

「面白く答える必要はない、必要なのは現実に対応する柔軟性だ」

「だからって、それ中学一年に言うセリフですか?」

「妙なところで頭のまわる生徒だと理解している。これも柔軟性だ、信濃」

いいから行って来いとプリントの束を渡されて、職員室から追い出される。

行きたくはないが行かざるを得ず、ポストに入れるなども考えたが受け取りが確認できない、または、手渡しをしない場合、本格的な保護者の介入も予想される。

信志は歩きながら今後のことに関しての思考を巡らせ、状況を把握していくことにした。

現在の状況は、教師の手元に問題が残されているだけだ。

しかし、これは一時的なものとして判断されているため、と、今回の件で認識を改めざるを得ない。

なぜ、こんな状況になったか？分かりきっている。

俺が『高町』に対する接触を拒んだからに他ならない。

説明すると挨拶はするがその程度の友人、最高の状態で知人を目指していたが程無くして状況は大きく変わった。変わらざるを得なかった。

高町家が近くにあつたためだ。

これは大変危険である。

HNMである『Takamati Nannya』や『Takamati kyoya』、『Takamati Shiro』に遭遇する可能性がぐつと高くなる。

まして、親が滅多にいないと知られた場合、劇中から考え接触を凶ろうとしてくる可能性が極めて高い。

そして、我が親父殿はその接触をした場合、彼らの提案を受けてしまう可能性が極めて高くなる。

とらハかなのはか図りかねているこの現状で、彼らとの接触は何としても避けたい。今は、分岐点なのだ。

このレポートを渡される原因となった高町美由希の欠席の理由は父親の怪我というもの。つまり、高町士郎は死んでいない。

残念ながら、とらハで彼がすぐに死んだのか、病院で死んだのかがわからない。これ

は、俺の記憶があいまいになっているからだ。

さすがに万能人間である自信は無いし、そこまで優秀という自負はない。

高町美由希にかかわるのはこの件が終わってからのしよと決めていた俺にとつては、都合の悪い話以外の何物でもない。

だが、強制的な接触を図られるならこちらにある程度手綱を握っていたほうがいいのには違いない。

「だからとて、喜び勇んで逝きたいくはないな」

因みに、逝きたいは誤字に非ず。目の前にそびえる地獄門を潜らねば高町家に入ることはかなわない。

ぼそりと呟いたセリフはいつの間にか降り始めた雨にかき消され、余計に気を重くさせられながら門徒を叩いた。

でたなHNM!ってあれ？

しかし、叩いた後でトンデモナイことに気が付いた。

いま、この高町家にいるのはHNMの中でももつとも凶悪な『Takamati N
ano ha』の可能性が極めて高いことに気が付いたので。

これがなのはだったら、死亡フラグになりかねないんじゃないのか？

そう思ったが吉日と、翠屋のほうへ出直そうとした瞬間、地獄の門は開いた。

「おかえりー！」

そこにいたのは栗色の髪をサイドテールに結んだ少女。

間違いなく『Takamati Nano ha』だ。

これが『なのは』であつた場合、時間がたてばHNMに成長するらしい。

フルアライアンス（…つまりは18人PT）とかでも鼻歌混じりに殲滅するHNMだ、
いつそリンクシユルでも作つて可能な限りの殲滅戦で倒すことが可能なのか検討に
移つたあたりで、目の前の少女がこちらを覗き込んでいた。

「あの…？」

なんと言うか、覚悟を決めるしかない。

あとは、以下に交渉をうまく行い、逃げるかだ。

一人で家に帰ってお母さんが作ってくれたおやつを食べる。

急に暗くなってきて雨が降ってきた。

怖くて、寂しくて、心細くて、泣きそうになって受話器に伸びかけた手をあわてて戻した。

私は、良い子だから——

そう、高町なのは良い子でなくてはならない——

じゃないと、だれも私に声をかけてくれなくなる。

きつと、お母さんは笑顔を見せてくれなくなる。

きつと、お姉ちゃんはお話をしてくれなくなる。

きつと、お兄ちゃんは頭を撫でてくれなくなる。

それは、とても怖いことだ。

それは、とても悲しいことだ。

それは、とても寂しいことだ。

だから、高町なのは良い子でなければならぬ——

良い子じゃなければ、私にだれも見るとしてくれなくなる。

友達は言った。

ナノハチャンは優しいね。

そうすると、友達のお母さんは言った。

ナノハチャンは良い子だからよ。と、確かにそういった。

みんな、私を良い子だから誉めてくれた。

なのはは、ナノハチャンで良い子でなければならぬ。

じゃないと、みんなは消えていなくなる。

膝を抱え、恐怖心と戦う。

そんな中、戸をたたき音が聞こえた。

雨の中、誰か帰ってきてくれたのだろうか？

もしかしたら、雨で私が寂しがってないか誰か来てくれたのかもしれない。

良い子にしていたご褒美かもしれない。

そう思っ、私が明けた戸の先にいたのは見たことのない、制服を着たお姉ちゃんと

同じぐらいの男の人でした。

「あ、そうだよ、そうなんだよ。なんで、俺はこんなことに頭が回らないかね」

私を見るなり頭を抱えた男の人みて、私はサーっと血の気が引いていくのがわかった。

私がしたのは家族を迎える為のあいさつ。

でも、彼は来客、なら、私が言うべきなのは「おかえり」ではなく「いらつしやいませ」

ではないだろうか？

まずい、私は彼に悪い子と思われてしまう。

そうしたら、彼は私から去って行ってしまふ。

また、独りぼっちになつて一人で遅くまで待たなければならぬ。

そんなのは、とても嫌だ——

「ご、ごめんなさい……ごめんなさい！」

堪らず、私は彼のズボンの裾をつかんで謝り泣いていた。

謝りだすと堰を切つたように涙が出てきて嗚咽が止まらない。

「おわっ!?なんだ!?落ち着け！」

男の人が驚く様に叫んで後退りとしようとしたのがわかり、余計に鳴き声を強く上げてしまった。

「ごめんなさい！行かないで！一人にしないで！」

そう、叫んだ私に少し間をおいてから男の人が初めて優しくなでてくれた。

それでも僕はやってない——

なんてセリフを言っても許されると俺は思う。

もつともそれは、この場にいる俺を含めた二人が10年位たたないと意味の分からないものとなり果てるだろうが。

ああ、一部の特殊な趣味の方々にはあり得るのかもしれないが、戦闘民族高町に知られた場合、リアルに首が飛びかねない。と、条件を付ける。

見方によれば彼女に別れ話を切り出して、彼氏に縋る彼女の凶なのだが、如何せん、幼すぎる。などと考えていると幼女が震えながら叫んだ。『一人にしないで』と。控えめに見てもこの家は大きい。そんな家に、一人で待つ彼女の心は如何様なものだったのだろうか？

フラッシュバックするように病室で伽藍洞になった空間に一人まつ、前の自分がよぎった。負担になりそうだからと言われ、せっかく来た友人知人が面会を早めに切り上げられない様に必死になって場を盛り上げ我慢した。夜は死の恐怖におびえて過ごした。昼は人はいたが付きっ切りという訳はなく人が恋しくて仕方がなかった。

だからなのかもしれない。

そつと、幼女を撫でた。踏み込むのが危険とはわかってはいるが、この状況で彼女を見捨てたら、きつとはとげが残る。笑っても笑えない、許しても許せない日が来る。

なにより、自分に被った人間を見捨てる。そんなことをしたら自信が許せないだろう。

幸いにして、今は幼少期。

手の打ち様もあるだろう。

樂觀的とは言うなかれ、うまくいけば場は収まり、学校に上がっていた相談は取り下げられる。逆を言えば、このまま帰れば禍根が残る。それだけは絶対に避けたい。

あー、そこ、腹黒って言うなよ？

どう見てもよろしくない混乱の仕方をしている魔王の卵に対し、コミュニケーションを試みる。

思いつき、基本的な対人交渉は一通り学んだはずだ。

前世の経験が無駄にするな、少なくともFFで学んだ追体験だけは裏切らないはずだ
俺！

あちらの理不尽大魔王こと、某博士は別としてだが…。

たしか、目線を合わせるのが基本だったか？

しゃがみこんで泣きじやくる魔王の卵に視線を合わせて、頭を撫でる。

出来ることならば、とんずらを使って逃げてみたい誘惑に駆られるがそこは我慢。

なぜなら、これを納めない時点で此処の住人に気が付かれた場合、良い未来は微塵に

想像できないからだ。

間違っても、いきなりこの物騒な卵が孵って魔王とならん事をアルタナに願う。

「はじめまして、信濃信志といいます。高町美由希さんはご在宅ですか？」

わかりきってるあたり、聞いてみるのは外道の極みということなかれ、少なくとも確認は大事、いなければプリントを渡して俺は帰る！そして、モーグリとプリンを食べるんだ！

家庭の事情とはいえなあ？

Oh my god!

いや、最後の思考が不味いのは知っていたよ？うん、本当に。

えーっ…と、現在、私は今、噂のHNМの巣である『Takamati home』にいます。

本当に広く、道場からは今にもPOPしそうな雰囲気がい、できることならデジヨンでもして家に帰りたいという気持ちを抑えるのが精いっぱいです。

もつとも、私め、現在、黒魔導師をセットしておりませんのでできませんがっ！

などと、アナウンサー風に報告してみるが状況など変わるわけもない。ちくせう…。

目の前にあるのは明らかに彼女のおやつのためにとっておかれたと見られるケーチが鎮座しており、ぶかぶかのエプロンを占めた魔王の卵…めんどろななので通すが、冷たいお茶をグラスに注いでもってきた。

まあ、なんだ。

びつくりするぐらい緊張してる。

俺もなんだが、なのはがだ。しかも、これはいい意味の緊張ではなく新人とかがミス

をやらかす時に必ずやる緊張、つまりはだ。

『自分は失敗してはいけない』

と、言うもの。下らない、実に下らない。

ミス一つなんだというのだ？ しない人間などいない、程よく注意し、たとえミスをしなくても補えばいい。

絶対にミスをできないというなら、しない状況にもっていくのが当然なのである。

見てるこつちがハラハラさせながらお茶をテーブルに置くとジーツツとこつちも見てくる。食べさせる気があるのだろうか？

そんなことを考えたとき、小さく腹の虫が泣いた音がした。

無論、俺ではない。序に言うと言の前の前にはが恥ずかしさで顔を赤く染め、自分の失態に顔を青くするという、絶対に二つ同時にできそうにないことをやってのけている。

「俺、お茶だけでいいから、ケーキ食べたら？」

「いえ、大丈夫です！」

一応、進めてみるが断固拒否の構えを崩さない。

非常に面倒で会話もない。

何処のお見合い風景だ？

「で、だ。お姉さんはいつ帰ってくるのかな？」

「あの、その、えっと……」

てっとり早く終わらせて帰る。

これが最善なのだが反応を見る限りまだまだ先になりそうだ。

少なくとも、描写では相当遅くまで放置されていた可能性が高い。

どう見ても育児放棄だが、本人はそれに気が付いていないし周りも同様だ。

「じゃあ、ケーキ半分こしないかい？」

「え？」

「いや、甘いもの嫌いじゃないんだけどこれは多すぎて残しそうだから半分食べてくれないかな？」

回りくどい言い方だが、やむ得ない。

呆けた顔でこちらをみているなのは声をかけ、ケーキを半分に割ってなのはの前に差し出すと嬉しそうに半分のケーキを食べ始めた。

しかし、だ。

姉は帰ってこない。

何時ごろ帰ってくかなど全く知らないが、おそらく深夜帯と考えていいのではないだろうか？

軽食やパスタを出すスタイルの喫茶店であれば尚のこと遅くなるだろう。

狙っている客層がどこにあるかわからないが、劇中に桃子がなのはと一緒に皿を洗う描写があつたはず、と言う事は6時から8時には帰ってきて家事をしていると考えられる。

あくまで家事をしているだけで食事をしていないことに注目したい。

帰ってきているのは母親のみであつて他の家族もいたがすぐに出かけていた。

これは鍛練と見て取れるが、現在の状況でその鍛練を行っているかは不明。

まして、下手に聞けば警戒されるなどの注目度が上がる危険性もあるため却下となる。

ともなれば、離脱したいのだがお茶がなくなるとすぐにお替わりを注ぐなのはが問題となり、雑談をしながら隙を見ては帰ろうとしたが「もう少しだけお待ちください」と足止めをされている為、離脱もできない。

どうしてくれよう、この状況。

さらに時間がたち、現在6時。

時間の経過が早いのは何も起きていないからだ。

しかし、ついに動きが出た。

小さく腹の虫が鳴いたのだ！

鳴かせた主は顔を真っ赤にしてうつむいている。

「そろそろご飯の時間だね、申し訳ないけどお暇しようかな？」

ここぞとばかりに帰ろうとすると、目に見えてがっかりするのはを見て罪悪感を感じないわけではないがフラグなどいらぬ。

「あ、はい、ごめんささい。お姉ちゃんには伝えておきます」

しよんぼりして答えるのは、心なしサイドテールが萎れて見える。

ようやく帰れる。そもそも、こう考えること自体がフラグなのかもしれない。

お姉ちゃんの友達は私のお話に相槌をうちながら、いろんなお話をしてくれた。

ところが、楽しい時間はすぐに過ぎるもので6時になるころ、私は致命的な失敗をしていた。1つは晩御飯のことを考えていなかったこと、2つはおやつを分けてしまい空腹に

なるのが早かったこと、3つめはお姉ちゃんは元より、だれもこの家に帰ってくるわけがないのを知っていた。つまり、嘘をついていたこと。

うそがばれるのが怖くて、お兄さんが帰るのが寂しくて、二人でいる時間が終わってほしくなくて必死だった。

私のおなかの音が鳴ると、お兄さんが帰ると言った。

これは当然だ。もう、おやつも残ってないし、私に用意されている晩御飯ではお兄さんはとても足りない。

そんなとき、電話が鳴った。

電話は翠屋から来てるのを知らせている。

私に一縷の望みが出てきた。

お店が早めに空けるとお母さんは、お兄ちゃんを迎えに出してお店で晩御飯を食べさせてくれる。

きつと、そんな我が儘を願った私への罰なのだろうか？

電話の内容は、そんな優しいものではなかった。

「ごめんね、お店忙しくて今日は遅くなるから先に寝ててね」

「あのね、おかあさん、いまね！」

「今、忙しいから帰ったら聞くから『良い子』にしててね？」

短く私の用件を伝える前にお母さんは電話を切ってしまう。折り返し電話を掛けることも出来るのだが、『良い子』でなければ私はならない。そうになると、電話はできない、すればお母さんを困らせてしまうから、でも、と、考えて後ろを見ると険しい表情をしたお兄さんがそこに居た。

「ひつ、ごめんなさい！許してください、嫌いにならないで！良い子にしますから!!」

私は気が付いたら叫んで泣きついていた。やめなきやって思ったのに止まらなくてしがついているとお兄さんの手が動くのがわかる。

ああ、そうか——

『悪い子』な私はお兄さんから引きはがされる。はがされるだけならいい、叩かれるかもしれない。

でも、しようがないのだ。

ただ、怖いものは怖い、思わず身を竦めると頭に手を置かれた。

「落ち着け、何か知らんが落ち着け」

お兄さんはゆっくりと口を開くとなのはにそう言ってくれたの。

少女の掌

で…だ。

これはどういった状況だ？

漸く、解放されると思つた矢先にかかつてきた電話は胸糞悪いものだった。

あれか？

なのははペットか？

なるほど、魔王はこうして作られたのか。

などと考えていると、なのはが抱き着いてきた。まさか、メガンテでも使つてこないだろうな？と内心戦々恐々としていると、なのはが必死になって叫んでいた。

なに、この別れ話を切り出したカレカノ状態——

落ち着かせようとなのはを撫でる。

ひたすら撫でる。

落ち着いてきたぐらいで撫でながら状況をまとめつつ今後どう動くかを考える。

これは重要な選択肢と言えるだろう。

間違えれば他の二次創作同様、済崩し的に管理局にばれて働かされるパターンになり

かねない。

ただ、何度も言う。

これまでの選択肢ミスで状況は極めて悪い。どうするべきか悩むが、そこまで考えてふと思った。

そこまで気にする必要があるのか？——

確かにフラグの成立は怖い。が、そこまで早急に立つものか？と言うものだ。

積極的な介入を行わず、この子に蝕んでいる『孤独』を取り除けば条件はぐつと軽くなると言える。

行ってみれば、近所のお兄ちゃん的なポジションに立てばあとはモブと変わらない生活を送れるのだ、試す価値はあるだろう。

ならば、行動としてとるなら……とりあえず、食事を取らせて落ち着かせつつ、士郎の病院と部屋を特定、白にジョブチェンジをして高位回復魔法を行う。

最悪、サポ学者にして女神降臨を行いリジエネⅠⅤとレイズⅠⅤをかければいい。

「なのはちゃん、とりあえずご飯にしよう」

まずは、飯だ。落ち着かせなければ話にならない。

なのはを落ち着かせつつ、戸惑う表情を浮かべさせたまま台所へと案内させ、また、渋い顔になるのを自覚する。

冷めた飯、電子レンジであつたためれば確かに温かいのだがそれとこれは違う。

『暖かみ』のない食事など、如何に旨かろうと栄養に優れようとカップラーメンと変わらない。

このまま、あつたためて彼女に与えてもいいが、放置した場合に彼女が不安定になる可能性は否定できないどころか：さらに精神的な不安定さに加速させることになりかねない危険性が出てくる。

メニューは鶏肉のソテーとグリーンサラダか、スキルとレシピを頭の中から検索をかけ使えそうなメニューを考え、頷く、幸いFFIXで作れるメニューは代替え品さえあればすぐに作れるし、応用も十分に利く。

FFXIが終末期に入れられたアップデートの中で人気を博したものの一つ、ランチプレート。

数種類の食事をギルドが販売していたプレートと合成することで作られる多目的ブーストを可能にする言わば『定食』である。

作るのはチキンライス・王国風オムレツ・森のサラダ・ジンジャークッキーの4つにオレンジジュースである。チキンライスとオムレツを合成するとオムライスができ、それをプレートに合わせるとオムライスセットが完成する、FFXIであれば、オムライスはHP/AGI/攻撃が上がる食事のだがプレートにすると更にMP/MND/

Hmpgがあがる。

コストが高くなる代わりにステータスの上り幅が高く、高レベルエリアのボスを倒す時などは愛用される一つになったものだ。

勝手に厨房に入って料理するのも如何とも思った為、なのはに待つように促し家から材料とあるものをモーグリに言って倉庫から取り出してもらってきた。

「さあ、食べるがいい」

半分以上は桃子が用意したであろうものを加工しているため実際に使ったのは卵とオレンジ、少量の野菜ぐらいでクッキーは家の作り置きである。

申し訳なさに、どうしたら良いか分からずにオロオロしているのはを見ていて和むものはあるが、目的を達成するためにもさっさと食べて情報を収集したいのが本音だ。

「でも、その、えっと」

「ふむ、割とよくできていると思うが…温かいうちに食べたほうがいい、冷めると不味くなる」

そこから更に少し迷っていたものの、空腹には逆らえず食べ始めるのが目を輝かせてこちらを見た。

「おいしいですー！」

「そかそか、たんとお食べ」

そこまで喜ばれれば上々、オムレツはHQだったから味の補正もかかるのだろう。

昔は、HQでは合成できない罌があったからなあ……などと考えているとクツキーとジューズを残してなのはが皿を下げてきた。

「よしよし、全部食べたな……お腹は一杯か？」

「うん！」

元氣いっぱいに頷くなのはを撫でて、洗い物を再開するしながら横にいるなのはに声をかけた。

これこそが今回の目的にして肝。

なのはの歪み除去の最大の問題である孤独の解消である。

「しかし、君の姉は何をしているんだ？いくら忙しいとはいえ、まさか、店で働いている訳じゃないだろうに」

オレンジジューズを飲み終わった私にお兄ちゃんは、お茶を入れると自分の分を湯呑に注いで呆れたように口を開いた。

どうしよう——

お兄ちゃんに正直に言ったほうがいいのだろうか？お父さんは仕事で怪我をしたん

だけど、周りには言っていない。でも、ちよつとならないよね？

「えつとね、お父さんが海鳴総合病院に今、入院してるの…それで、お姉ちゃんは看病で」「ええっ!?! 本当かい? それは…悪いことを聞いたなあ。」

聞くや否やお兄ちゃんは驚いてばつの悪そうな顔をしながら頭を撫でてくれる。

しかし、不意に頭に乗っていた重みは消え、目を開けてみるとお兄ちゃんは鞆を開けて何かを取り出していた。

「お詫びにこれを上げよう」

透明な液体と不思議な淡い白色の光を放つ欠片の入った瓶を、私に差し出した。

「これは?」

「これはお守り、願うとこの白い欠片は少しずつ消えていくつて言われているんだ。きれいでしょ?」

良くぞ聞いてくれましたとばかりに胸を張って答えるお兄ちゃんは、今までの真面目そうな印象とは少し違っていて、受け取ろうとしない私の手に瓶を握らせるとそつと笑んだ。

「今夜に月のある方向を向いて願ってごらん、もしかしたら叶うかもしれない」

微笑みながら真摯な目で私を見るとお兄ちゃんは立ち上がり、大きく背伸びをした。

「さて、そろそろ僕は帰るよ。お姉ちゃんによろしく」

「あ、はいっ！わかりました！」

お兄ちゃんに言われ、時間も時間なためこれ以上は引き止めれないと判断して、玄関まで送ると手を振りながらお兄ちゃんは帰って行った。

久しぶりに誰かとご飯を食べた…。

もちろん、幼稚園でも食べたりはするけど、こうやって家で食べるのは本当に久しぶりだった。

朝はお母さんがいるけど、準備で忙しそうで食べることはないし、晩はいつもレンジで温めている。

ああ、そうだ、すごく楽しかったんだ——

お風呂呂に入って寝る準備が整った頃、ようやくお姉ちゃんたちが帰ってきたのか玄関が若干、賑やかになる。

なんとなくのだけど、あの輪の中に入り辛くて、少しだけ顔を出してお兄ちゃんが顔を出してプリントをおいて行ったことを伝えると部屋に戻って布団に入る。と、その時、机に置かれた瓶が目に入った。

願いがかなうかもしれない——

不意にお兄ちゃんの言葉を思い出し、私は窓に瓶を置くと静かに願った。きつと、お父さんがまた元気になれば元に戻る。

また、お兄ちゃんとお姉ちゃんが楽しそうにおしゃべりして、お父さんが私とお母さんがそれを見て笑うようなそんなときに。

だから、どうか、どうか、私の孤独を救ってください。と――

閉じていた眼をそつと開けると、窓に置かれていた小瓶から欠片が消え、淡く輝く水だけとなっているのを見て、私はその不思議な現象を不振がるよりも先に、小瓶を守るように、縋るように抱きしめて眠りについたのだった。

褒める。ただそれだけなのにどれだけ難しいか。

真夜中の寝静まった丑三つ時に月明かりが照らす病院の中に彼はいた。

白と赤を基調にした衣装を身に纏い、見回りにくる看護師に見つかればすぐに通報されるぐらい、見事に浮いていた。

尤も、『見つかれば』だが。

「こちらスネーク、大佐、指示を頼む」

さて、バカなことをしてもばれていない彼が緩慢な作業をして、だれにも見つからないのは『見えないから』だ。

インビジと呼ばれる不可視の魔法を使い、その場に立っている彼だが、スネークと呼ばれる消音魔法は使われていないため、音がダダ漏れして目の前にあるナースステーションから小さな悲鳴が聞こえてきているが、彼は気にしない。

だって、今の状態で驚いていたら、もつと驚く羽目になるのだから。

「白のグリモアよ、目覚めよ！女神よ、ここに癒しの加護を、ハートオブソラス！」

眩ぐぐらいの声なのだが、広い空間である病院では異常に音が響き、それと同時に現れ男にナースから悲鳴が上がる。

むしろ、悲鳴を上げるなど言うほうが無理だ。

眩く声と同時に行き成り、目の前に男が白く輝く本を持って現れ、薄い青色の光が波紋を浮かべながら男を中心に広がっていくのだが、その怖さたるや想像するのも難しいだろう。

だが、無情にも言葉は続く。

「女神降臨の章、レイズⅣ」

何も知らない人間から見れば、この言葉を吐いた途端、彼から無数の光が回りながら現われ、さらに気泡とも光とも取れない何か彼の周りに大量に浮かび上がる。

「傷つき倒れるなかれ、汝は倒れる時に非ず。我は其の断りを許さず、女神は慈悲を与えたり」

神託の様に告げると男は手を天井にかざすとさらに光は強くなり、周りは光であふれたあたりで悲鳴を上げていた看護士は意識を手放した。

「女神降臨の章、ケアルⅤⅠⅠ」

この光景は防犯カメラにも映し出されており、海鳴の奇跡として度々、茶の間をにぎわす種として使われる映像となるが、ここでは省かせてもらう。

映像は男がゆつくりと消えるその瞬間までおさめられており、そのあとに危篤患者も含む大量の怪我人が息を吹き返し、病院はさらに大騒ぎとなるのだが、そんなこと彼に

は関係のないであった。

人生とはままならないことの連続であり、日常は非日常の積み重ねである。

何が言いたいかと言うと、結果的に何も変わらなかつた。とだけ言おう。

なのは歪みを除去して『無印』であつたとしても、あの性格が変われば、意味の分らない説得という名の暴力や押しつけがましい善意から逃げられる可能性が増える。なにより現状の最大の問題であつた高町美由希の生徒間の不和に関する相談が、取り下げられる可能性が高くなると踏んだためだ。

が、しかし、現実はその動いてはくれなかつた。

あのアホ一家、末娘ほつぽいて、大黒柱が回復傾向になつたのをいいことに起きたばかりの親父はリハビリに母親は店に本格的に集中しやがつた。

蓄えがないとは言わせない、何年も前なのでうる覚えだが、どう考えても親父のほうは高度医療を使つており、申請をすれば結構な額は戻ってくるはずだし翠屋は連日満員御礼、周りにライバルらしいライバルも存在しない。

独占禁止法違反じゃないのかとさえ思えるほどの人気っぷりを発揮している。

確かに、ここでさらに地盤を固めようと思うのは商人として間違つてはいない、自分の技術が認められより安定した収入につながるのならそれに越したことはないのだから

ら。

だが、である。

娘を放置していいものか？

様子を見たことがある。

1度や2度ではない、しかし、その中に一日として仕事を早く切り上げ帰ることはない。

売切れれば次の日の仕込みと新たな商品開発を息子と一緒にやる。

嗚呼、一人息子なら、美由希と彼ならさぞ理想的な家族なのだ。

息子は母を手伝い、娘は父を支える。

結論的に言えば、あの家庭は子供が一人か二人で定員となる家庭と言える、いや、事故がなければまだ違うだろうが、なのはが劇中で言っていた『私はこの家では浮いている』だったその当たりのセリフはなかなか的を得ているのだ。

同時にここには『とらハ』にいる居候がない。まだ来ていないのか、やはり無印だからなのか、これでは彼女に目を向けるものがない。

これはまずい。物凄く不味い。どれくらい不味いかと言えば、生命感知のモニターだらけの場所でリレイズを行使して、HPゲージが真っ赤の状態で起き上がらねばならない位には不味いのだ。

なぜ、不味いかって？

あのエリアあらため、BCたる『Takamati Home』に俺がプリントを持っていかねばならないからだ。

その回数、すでに3回。

2回目の時はよかった。出迎えたなのはが嬉しそうに、俺に報告してきたからだ。

曰く、お父さんが目を覚ました——

と、人外の構造は知らないがすぐに退院できるだろうと踏んでおり、当時、俺は樂觀視してしまった。

レイズで死の淵に居ようとなんだろうと対象を指定した上で、女神降臨を使い範囲魔法として使い、PTにしかつかえないケアルガを止め、ケアルに女神の印と女神降臨を使い、HPが1だろうと完全に体力を戻した筈なのだ。

しかし、あのアホ一家、あんなことはないようにと病院でリハビリにいそんでいる。3回目を訪れた時になのはがしょんぼりしながら俺に教えてくれた。

聞いた瞬間、フレアIIIあたりでもぶち込もうかと思っただけの話である。

そして、同時に発覚した驚きの事実——

スキルもない癖に渡した蒸留水を聖水にしていやがりました。

何、この魔王？

しかも、手に取つてみると頭に浮かぶ表記に『聖水*3』とある。

HQ成功してんじゃねえ！と叫び、魔王のスペックに恐れ慄きそうになるが更なる恐怖がそこに待ち構えていた。

晩飯に誘われました。

いや、幸いなことに翠屋じゃないんですがね？魔王猊下直々のお手製なわけですよ？

いや、そこらへんに良く出ているOHANASHIなんて出来ない筈だしされても逃げる訳ですが、こうやって出されると不味い。

いや、だつて考えてくださいよ？小っちゃい子が一生懸命『ナニカ』を作っているんですよ、台所で。見に行ったら座つて待つててくださいいって言われるし。

いや、待つしかないでしょ？ここで下手うつと本当に呼ばれかねないし。

混乱のあまり、いや、と何度つづけたか分からなくなつてきたけど出されたメニューはサンドイツチと元々あつたサラダを分けたものだ。

予想していたより、遙かにまともである。

正直、カタゆで卵とか切つただけのチーズなどを筆頭にする素材群を想像していただけにこれは良い意味で期待を裏切られた。

何気なくサンドイツチを手にしたところで気が付いた。

サンドイツチの具である。

FFにも末期に追加されたものではあるがほかのサンド系やおにぎり系同様、中身の具の選択があつた。

何が言いたいのかと言うと、具が高度すぎる。

挟まれていたのはハンバーグ、決して彼女が簡単に手を出せるメニューではない。

何より、俺がトースターと電子レンジを使う以外の音を聞いていないのだ、作れるはずがない、と言う事は彼女用に用意してあつた食事をサンドイツチと言う形にすることで量を補つたとみていいはずだ。

そして、ここで何よりも難しい選択肢が生まれ出る。

ハンバーグサンドをワザと齧り付き、ゆっくりと咀嚼しながら皿を見る。

皿の上にあるのはベーコン&レタス、チーズ&トマト、ツナタマゴの3つ。

ハンバーグを含めた4つの内、いくつかは本当に『手作り』なのだ。更に言えば、彼女にとつて褒められた一品が紛れ込んでいる可能性が高い。

あの『なのは』が『良い子』であろうとする以上、何かしら褒められるであろう行動をとると予想され、前回、前々回の対応から考えて何らかの対処をしてくることは明らかともいえるからの判断である。

情報を整理してみよう。

おそらくはハンバーグ+αが彼女の夕食だったと思われる。

そこからレタスやチーズは冷蔵庫に入っていた可能性が高いが、残りの怪しいものはベーコンとツナタマゴである。

普通ならツナタマゴと答えるのだが彼女は卵は茹でていない、と言う事は卵も冷蔵庫にあつたと考えていいだろう、ツナとあえて出したのは間違いなく彼女だが、それを言えばベーコンを切って出したのも彼女だ。

何を褒めるべきだろうと続いて手を出したサンドイッチを手にして気が付いた。

温かいのだ。

なるほど、頷き、何を褒めればいいのか見つけた俺はようやく、不安げにこちらを見るのはの頭を撫でた。間違っていないことを必死に願いなながら。

「ちゃんと、具材を温めたり、パンを焼いたりしてくれたんだ、ありがとう。美味しいよ」
そう、褒めるべきところはそこなのだ。

一々、考えないで答えてもいいが、できるならば問題は避けたい。となるとやはりこうなつた。

二人でそのあとはゆっくりと夕食を平らげ、食器を洗い帰り支度をする。

この時なのは、なぜか鞆を持って見送りをしてくるが、毎度の流れで今回もそうだろうと信じていた俺が馬鹿だったのかもしれない。

自分自身が明らかかなトラブルメイカーとも言うべき特異点がここであるのだ。

何も起きない訳がない。

「ただい…ま？」

「おかえり、プリントは置いてある。SHRまではいたんだから説明はいらないともうが何か質問は？」

なのはの見送りを受けて玄関を出て表門から出ようとしたところで高町美由希が出てきた。

「えーと」

言わずもが不信を含んだ目で見られる。学校で不仲だったはずの男子生徒がいきなり家において、妹に見送られているのだ、プリントを持つてきてくれたことは感謝こそしているが、何故、こんな遅くに家から出てきたのだろうと疑問に思うのは当然と言える。

これがまだ、私服ならよかったが学生服に鞆持ちである、家に帰らずにまっすぐ来たのに関わらず、今は午後8時を回ったあたり、これを不審と見なくてなんとする。

「妹さんが夕食を御馳走してくれたので御呼ばれただけだ」

「ああ、なのはが…って、そうだ！信濃君、なのはにご飯作ってあげてなかった？」

「それが何か？」

冷蔵庫の食品には手を付けていないが調味料は使っているし、普段と違う場所になべ

やフライパンを置いておけば気も付くだらう。

「ごめんね、なのはが迷惑かけて」

玄関のほうからビクン、と動きがあるのがわかる。

この戯けは、なのはの歪さに磨きをかけたのかなんなのか…もしくは俺に迷惑をかけたくて仕方がないのかどれなのだ？

「迷惑…ね、どちらかと言えばお前が迷惑なのであつてあの子に関して何ら迷惑はかけられていないな、あの年なら出来すぎた行動ととれる。そもそも、気まぐれであの子と遊んだだけだ、そっちが気にすることじゃないな…ああ、調味料とかを勝手に使ったのはすまなかつた」

尤も、と一旦言葉を切り、美由希が呆然としているのを無視して言葉をつなげる。

「学校に来ているくせにプリントも受け取らないで、その上、家で健気に留守を守る妹をほっぼりだして、夜遅く帰ってきた挙句、冷えた飯を食わせた事を棚に上げてあの子を怒るようなことはしてやるなよ？」

「それは…！」

反論しようとするものの手ごころな反論材料がなかったためか、言葉を止めた美由希が小さくわかつたと頷くのを確認して、俺は家に帰った。

善行とは——？

用は済ませたし、会話もした。

ついでに言えば、態々、担任のメンツも立てて届けなくてもいいプリントを届けていたのだから、もう頃合いだろう。

彼女は学校には来ている。

にも関わらずプリントを届けなければいけない理由は一つ。

この問題を解決するためにほかならず、教師による介入を強く出さないようにするた
めだ。

話をする機会を欲していたのだが手が不味い、と言うか状況だな。

人に話しかけるには礼を失しているのだ。

少なくとも、プリントを回してもらおうように手を回したのなら待つなりなんなりすればいい、が、彼女はしなかった。

父親を優先するのはかまわないが、足止めになのはを使い、いぎ、来てみれば自分は悪くない、あくまで足止めしたのはなのはと匂わす物言いは姉の言うセリフではない。

もちろん、これは穿ちすぎる見方でただ、端にお礼を言っているだけとも見て取れる

し、父親を優先せざるを得なかったかもしれないが付け入る隙を見せているほうが悪い。

親に迷惑がかかるのは避けて通りたいところだが、このまま、ずるずると折れるならさつさと小細工を入れたほうが後々楽だ。

父に電話を一本入れ、迷惑をかけるかもしれない旨を述べ謝ると、快く頷く訳ではないが積極的な介入も否定もなく。

「まあ、碌にそばに入れない僕が強く言えることではないし事情があるんだろう。せめて迷惑ごと位は親らしく喜んで引き受けさせてくれよ？」

との回答を得た。

まあ、めんどくさくなるのはここからが本番だった訳なんだが…。

正直、行動力と言うものを甘く見てた。

しばらく、彼女が大人しくしていたところから遂に諦めたかと喜んでいた矢先のことだ。

高町士郎がリハビリを終え自宅に帰ってきたのを祝ってパーティをするらしいので参加してほしいと美由希から直々のお誘いを受け――

「なのはも会いたがってるし、よかったら」

「よくないので断る」

断った。

なにか問題が？

「君の希望であった日常的に会話もこなしているし避けているわけではない以上の譲歩する必要性が全く感じられないそもそも参加する名目はなんだ？ 家族の団欒に異物が紛れ込んでいいはずがないと言うよりも何か月単位でようやく家族団欒なのだからここは一家庭の区切りをつけるなり店の従業員を誘ってやるなりすれば良い訳で俺を呼ぶ意味はまったたくそこには存在しない仮になのが会いたいと言うがそれはパーティーで会う必要が皆無な訳だが理解しているか？ 理解できなくとも構わないがパーティーは遠慮するしなのはの件に関してはこちらで一考する。以上だ」

一言でまくしたてて回れ右をして教室を出る。

が、誰が言ったか魔王からは逃げられない。は現実にあるようだ。

だって、校門を出たところに魔王が目の前にいたから。

「あ、あのー！」

魔王は顔を真っ赤にしながら袖をつかんで意を決したように口を開いた。

「お店でお祝いをするので一緒に来てくれませんか？」

振りほどくのは簡単だし逃げるのも簡単、だが、そのあとの評判がどうなるか分から

ない。現に小さい子が勇気を出して精一杯のお誘いをしている以上断るな世的な視線も飛んできている。

そもそも、如何に相手が魔王だろうと今は、幼児なのだ。つらく当たるなどできるはずもない。

結果——

「……はいはい、行きますよっと」

ため息一つつきながら、学校を後にした。

にこにこ嬉しそうに笑うのはと疲れたような信志、そして、空気のように忘れ去られた美由希を連れて——

レイズとケアルについては、病院で行った魔法によりある程度、推論が立てられていた。

元々、この魔法は女神アルタナの慈悲によって行使されるものではあるが、なぜか獣人などの明らかに女神側じゃない種族や生命体にも効果がある。

尤も、それぞれに理由はあるが。

とりあえず、話はそこそこにして、ケアルとレイズが効く条件として生命力が上げられ、魂に力があるか否かがその分かれ目となると考えられる。

HPが0の場合、魔力で一時的にHPを補うための術式であるレイズが使われ、破損された魂の器たるHPが完全に定着するまで衰弱の状態となり、ケアルは魔力を持って傷を塞ぎ体力を補完する。

つまり、病院で奇跡の恩恵を受けたものは一定の魂の強さを持っており、こぼれたものは寿命ないし生きるだけの魂を持っていなかったと考えていた。

なぜ、こんな取留めない事を考えているかと言えば、現実逃避である。

と、言うよりは俺のした行動に意味はなく、なのははなのになるべくしてなのはになったと、認識をさせられざるを得ないかった。

だからだろう。

隣で魔王が甲斐甲斐しく俺の世話をしている。

お茶のお替わり如何ですか——

あ、何か食べるものもってきます——

幼稚園で——

この前、テレビを見てて——

お留守番してた時に——

何一つ、家族に関する会話がなかった。

いや、見ていればわかる。

彼女は家族の会話に交じれていなかった。

高町夫妻は仲良くしゃべり新婚のようだ、兄妹も恋人のような睦まじさを見せており、時折、夫妻と兄妹は相手を変えながら喋っていた。

会話が無い訳でもない、無視された訳でもないし、当然のようにこちらに向けられている視線がある。

ただ、なのはにかけられた言葉は少なく、俺も同様で心配や気遣いはわかるがそれはあくまで『わかるだけの年齢や技能をそれなりに有しているもの』の話だ。

小さな子供がそんなものをわかるはずもなく、彼女の期待とは裏腹に精々、俺への謝罪と感謝の言葉。なのはには窘めの言葉が述べられ、夫妻も兄妹も他の来客への対応で忙しそうにしていたのを見て、なのはの頭を撫でながら何度目ともしれないため息をついた。

パーティーはわかる。

ある種の節目と捉え、それを祝う事で次への助走をつけることができるし、こうして知人や友人を呼び店としてのアピールができる利点をうまく利用しているとさえいえるが、やはり、家族としてのコミュニケーションは圧倒的不足になる点はぬぐえない。

この状況下において信志は不機嫌だったが更にそれを加速化せられている最中だっ

た。

理由は簡単、目の前の存在が原因である。

パーティーは終わり、帰るつもりが呼び止められ、所謂、家庭の事情を根掘り葉掘り聞かれた。と、言うよりは確認だろう。

現在は一人暮らしに近く、親はあまり帰ってこない。成績は並、友人関係は良好。

母親が一緒じゃないと答えた後は何も聞かないあたり、そちらの情報も流出していると考えて間違いないだろう。

あの見合い男^相、俺の情報流しやがったな…。

「なのも懐いているし、良かったら家に来ないかい？」

「結構です」

善人ではあるのだろう士郎の申し出をきっぱりと断った。

独論ではあるが、善人には2つのパターンに分けている。

周りの人間を幸せにする善人と自分が幸せになる善人だ。

前者は周りのことを考えて動く人間で、過程を進みながら満足していくタイプ、後者は良かれと思えば一直線に行い、頑張る自分を見て満足するタイプ。

さして違いはないようではあるものの、最大の違いは拒否できる善意と押し付ける善意である。

分かりやすく言えば、彼らは店の店員で、信志は客にあたり、何かを買うとして、前者はカタログを渡すだけに対しアドバイスに徹しあくまでも主導権は買い手にある、後者はこれが良いと決め只管にそれのみを進め、主導権がいつの間にか売り手にある。

買い手は、品を買うのもやめるかもしれないし、何か買うかもしれない。希望の形や性能、機能を求めている場合もある。前者は柔軟性があるのに対し後者はそれがない。

これが最大の問題である。

なぜ、そのようなことを今更、長々と考えているのかと言えば、この押し問答、既に5回目であるからだ。

彼の出自は特殊だ。生まれもだが、何より転生してきており厄介ごとに巻き込まれることを恐れ、異分子の乱入による物語の崩壊や最悪、この世界そのものの死に繋がることを理解しているため、彼なりに設けているパーソナルスペースというものを一層複雑なものにさせている。

もはや意味をなさない筈なのだが、ここにきて彼らが手にしていた電話を信志に渡した。

『信志か？高町さんから話は聞いた、君もすっかりはしているがまだ子どもだ、下宿も考えたけど家から離れるの嫌がってたど。家も近いし高町さん乗り気だしどうだろう？』

『父さん!』

いったいどんな説明をしたのだろうか？ひとり家に残すことに抵抗を覚えていた父からすれば確かに渡りに船であり、ありがたいことこの上ないだろう。信志は現状と高町夫妻の周辺の評価を考え、頭を抱えた。

夫妻は周囲からの評判もよく、兄妹の反応も悪いものはない。

娘をよこすならともかく、寄越すのは息子で向こうが乗り気ならば尚のことである。

『まあ、どうしても嫌なら構わない、けど先方さんにも失礼のないようにね』

『まって…』

嗚呼、こうなつては断ること自体が『失礼』にあたつてしまうのを父親は理解したうえで行つたのだらう。

面倒だ。

物凄く、面倒だ。

これが、彼の偽りない感情だが下手に断り波を作るのはまずいし、避けたところで美由希となのはが付きまとう可能性は高く、ここに住んでいる以上、避けることはできない。

つまりは、既に彼は詰んでいるのだつた——

「はあ、では、よろしくおねがいします」

信志はあきらめ、何度目かになるか分からないため息をついて頭を下げた。

見ユル先ハ未ダニ遠ク

さて、衝撃の強制イベントから数ヶ月ほどたった。

その間も当然のように緑屋は営業しているため、なのはの面倒を見るものがおらず信志がなし崩し的に面倒を見ることが続ぎ、彼の意思に関係することなくなのはの好感度を稼いでいく中、彼は学校のパンフレットを読み漁っていた。

目的は、とある条件を満たす学校を探すことにある。

風芽丘では無理で、と言うより海鳴市において今のところ彼の中の条件を満たすところが一つしかないのだ。

その条件とは…。

「なんで、寮がないんだ…」

高町家を抜け出すための条件に必要と信志が考えているものの一つ、寮がある。

かと言つて、家から離れすぎれば父親にまた別の気を使わせる。

そもそも、寮があるとあるのであつても高町家は家から通えと言うのが予想されるだけに面倒だけかもしれないがやる価値はあつた。

「聖祥か…」

避けたいところではあるがそれ以上に条件が魅力的だ。

成績優秀者には特待制がとられさまざまな形で恩恵にあずかれる。

年齢的に考えれば、なのはが来年には小学校に通うこととなるが高校では訳が違うし、適当に部活に入れば寮もいるのも、高町家に寄り付かないのにも良い訳としては上等だろう。

いっそ、海鳴市から出ることも検討に上げるべきと信志も考えたが良くも悪くもこの土地に愛着があり、父親がここを帰る場所となつていいるならそれを守るのも子の勤めと割り切つていた。

ある程度成長したらば、この地を離れてもいいし、この地で何か始めてもよいだろう。幸いなことにFFで培った技術は想像を絶する苦しみとともに脳にインプットされている。

が、それは強制されなければの話であつて押しつけの善意で固められた道など歩きたくない。

選んだ以上は事情がどうあれ、子の責務を全うしなければならぬからだ。

尤も、これは父親に感じている引け目や恩から来ているものだが、この状況は信志にとつて面白くない展開なのだ。

親への恩は返す。母親がどうなろうと知ったことではないが、生んでもらつた義理ぐ

らいはある。しかしながら、父親ともなると話が違ふ、気が付けば世話になりっぱなしで受けた恩は数知れず、礼を言えば『親とはそういうものだ』と返される始末、恩を返す当てはいまだ見えない。

いずれ、結婚して子供が生まれたならば、その子供の返そうとは思うがそれとは別に父へ何らかの感謝を残しておきたいところではある。

故に、父の希望は極力応える。いや、応えなければならぬと信志は考えていた。だからこそ、この高町家下宿も飲んだ。

卒業が迫ってきたこの時期、抜け出す数少ない機会が進学である。

国立を最初は考えていたのだが、この海鳴に関して言えば国立は近隣にすら存在せず、信志の考える条件である寮がある学校も少ない。

これは海鳴の立地がベツトタウンであることが大きい、家があるのに態々、寮を選ぶ人間が少ないためだ。

そんななか条件を満たす物件を見つけた。

気になっていた金銭面だが公立に比べれば割高ではあるが、何らかの特待制度を得ることができるのであればむしろ公立より安い。

少々、ズルいかも知れないがここはジョブをフル活用させてもらう事にしよう。進学先を高町家に伏せたまま、父に相談したところ、快い返事をもらっている。

難色を示すかとも思ったが、年頃の娘がいる家に下宿するというのは父親である彼としても抵抗感がなかったわけではないらしく、むしろ、士郎によつて押し切られてしまったが迷惑をかけて申し訳ないという苦々しいものが割合としては多くなつてきていた様で、入寮もできる学校である旨を報告すると学校のレベルの高さに驚いてこそいたものの、頑張れとのことだった。

ただ、最大の問題であるこの一家をどうするかが残つていたのだが——
「信志君、それは本当なのかい？」

「はい、高校に入るのを転機としてこちらから出させていただきます」

士郎の問いに正座の姿勢を崩さずにはとうなずいた。

「無理に寮に入らなくてもいいんじゃないかしら？ なのはだつて懐いてるしせめて受験までここに居たらどう？」

「いつまでもここに居る訳ではないですし、高校に入れば今のようになのはの面倒を見るのも難しくなります、それに受験勉強に専念したいので」

彼女に懐かれてしまったのは問題ではある。

信志なりに性格の歪みを直すべく手を打つてみたものの結果は芳しくない。

結論だけ言つてしまえば、彼が行つた行動は好感度≡依存性となつて引き上げてしまっただけなのだ。

なのはから見れば『良い子』ではなく、『なのは』を見てくれる人に。

時に可愛がり、出来た事を褒め、我が俣も嗜め、行き過ぎたことをすれば戒める。

彼はカウンセラーではないし、彼なりにには努力したが、元々は親がやすべき教育であつて、すべき二人はなのはと信志のやり取りも見て安心してしまい仕事に傾倒していくという悪循環が生まれていた。

果たして、彼女はまた、あの状況に戻されて耐えられるのだろうか？

情がないと言えば嘘になるが、このままなし崩しは回避したいし、そもそも、本来、親が気が付いて直すのであつて他人である信志のなすべきことではない。

無論、放置する訳ではなく多少ならばフォローもしようと信志は考えていた。

尤も、それは信志の領域を侵食しない限りと線引きされているが。

「別にこつちで勉強してもいいんだけどね、一人は大変じゃないかい？」

「問題ありません」

引き留めようとするとする士郎に信志が断言する。

「つらくなつたら、いつでも戻ってきていいのよ？なのはも顔を見たがるだろうし」

「つらいと自覚したら戻ります」

残念ね、と頬に手を添えながら言う桃子に、内心はそんなことはありえないだろうと信志が思いながら答えた。

そして、引き払う当日、ボスが動いた。

玄関口で信志は足止めされている。

具体的にはなのはに服をつかまれて泣きつかれているのだ。

『良い子』のなのははそんなことをしないでだろう。

だが、信志は一か月の間に彼女と触れ合い、『普通』の子供として扱った。

恐る恐る我が儘を言った彼女に付き合い、正しい事をすれば褒め、悪い事をすれば怒る。

それが、彼女にとってどれだけのカルチャーショックになるとも知らず、行った。

ある意味、彼は甘く見ていたのだろう。

前世ではそれなりの過程でそれなりの愛情を受けて育ち、今世では片親でこそあるが与えられた愛情は何ら遜色ない。

愛情に飢えた子どもに与えてしまった時の反応を全く考慮していなかったのだ。

彼にしてみれば、多少でも普通に近い生活を行い子供らしさを取り戻してほしい。位なものだったが、常に愛情に飢えていたなのはは違う。

それは、劇薬にも等しい効果をもたらす。

決して、高町家においてなのはは愛されていない訳ではない。が、注がれている訳でもない。

朝は家族と食事をとり、晩も家族こそいないが食事は用意され、子供の喜びそうなおもちやも揃えられ、学校も名門私立に入れてもらっている。

ただ、そこに足りないものがあるならば、触れ合いだろう。

親や姉はリハビリと称して、修行三昧。そこには兄の姿さえ見られる。

なのはとて、家族と痛くて希望しなかった訳ではないが「怪我をするといけない」と言う理由で断られ「なのはの事が心配なんだ、わかるな？」と言われれば、それ以上言えない。

母も同様、兄も手伝っており自分も何か手伝えなかと聞いても父と似たり寄ったりな言葉で断られた。

詰まるところ、信志と触れ合ってしまったが故に家族と折り合いをつけてしまったのだ。

嗚呼、この人達はこういう存在なんだ——

と、ある種の諦めが混じり従順に接することを彼女は選んだ。

家族、家族と言いながら彼女の位置はペット・家畜と変わらないのだと、彼女は無意識に解釈を行い理解してしまっている。

ただ、それは間違いでもあるのだが否定する材料もない。

贅沢な暮らしをさせて気が向いたら構う。要求するのは従順で尻尾を振ってじゃれ

てくる可愛いペット、そう考えてしまうと彼女はすんと心が落ち着いた。

続けて彼女が無意識下で行ったのは他の対象を探すこと。

対象は直ぐにできた。

友達と我が儘を言っても何をしても見捨てずに『良い子』と頭ごなしの説明をしなかつた信志である。

関わり合いになりたくはないものの、小市民性と言うべきかお人よし加減が抜けきらない信志が目の前にいたなのはを放っておけなかつただけだが、彼女にとってはそれは砂漠に彷徨っていた旅人が見つけたオアシスに見えたことであろう。

もう一つは、友人なのだが、彼女の以前の立ち位置が災いし「いてもいなくても変わらない」と言うポジションを堅固なものにしており今更それを崩せず、無理して崩して今以上の孤独にさらされるのが怖く動けなくなっていた。

だから、彼女が家を離れようとする信志に縋ろうと言うのは必然ともいえた。

離れられるのは怖いが、無理を言つて嫌われるのはそれ以上になのはにとっては恐怖であり、曲がりなりにもようやく我が儘と言う甘えを受け止めてくれる相手がいなくなる。

親に絶望し、兄妹に諦めを見た少女にとってそれは、譲れない一線だった。

「いつちやうんですか？」

ズボンの裾を握りしめ、目には涙を浮かべた少女が懇願している。それだけで撤回する人間もいるにはいるだろう。

が、信志はその中に入るモノではない。

端的に言えば、他人よりも自分を彼は取る。冷たいかも知れないが、彼が望んでいるのは血肉沸き踊る冒険ではなく、平穩無事な人生である以上は仕方なしと言つてもしようがないだろう。

何より、彼がおそれているのは原作の崩壊で、良い方に物事が進むなどと過信するつもりはなく、彼にとつての世界は『今、ここにある世界』なのであつて『テレビや2次創作物で見るもの』ではないのだ。

「勉強しないと行きたい高校に行けなくなるからね」

ついでに言えばこちらも、良くも悪くも本音である。

未だにこの国は学歴社会であり、尚且つ、資格社会でもある。

彼が得た技術から一定以上の評価は受けることができるだろうがそれにしても限度がある。人が人を評価するにあたっていくつかの項目がありその中に、必ずと言つていほほど学歴が入る。

高学歴で関係ない職業についていたところで変わり種として見られるだけだが、逆はそう見られづらいのは確かだろう。

好意的に見てくれる人ばかりではない。それが世間と言うもので下世話であればあるほど、喰い付く人もいる。

何より、ここらで離れなければなのは小学校へ上がり、繋がりが必要以上に強化されしまい抜け出すのが難しくなり、抜け出すためにどうしても必要な一手となったのだ。

「私のせいですか？我が儘ももう言いません、悪いところがあるなら直しますからっ！」
「なのはちゃんのせいじゃなくて、自分のために動いているんだ」

「自分のため…？」

セリフをオウム返しのように呟くのはに信志が目線を合わせて頭を撫でながらセリフを続けた。

「そう、自分のため。確かに『今』は大切だけど、その先がある。欲張りすぎかもしれない、けど、上もある。少し大変かもしれないけど、頑張らないと後で大変なことになるんだ…それにそこで得たことはきつと無駄じゃない、だから先に行くんだ。欲しい未来がそこにあるはずだからね」

ここで別れることは『高町』と言う中心点から離れることになる。

3〜4年ぐらい、離れていればおそらくは大丈夫だろう、そのころにはなのはは4年生、そうなれば向こうが忙しいだろうし、思い出に代わっている可能性も高い。

「だから、暫しのお別れ、もう会えない訳じゃない。だから大丈夫、ね？」

「……また、お話してくれますか？」

握っていた手が緩め、そつと信志を見るのはに満面の笑みを浮かべて頷いた。

「もちろん！」

そうして、時は過ぎる。

そう、無印の時代へと

試合に勝って、勝負に負ける。

入学し、一年経ち新入生がちらちらと入部先を見つけ、夢や未来に目を輝かせる。

2度目の桜を見ながら、思わずため息をついてしまった：無論、火がこちらにあるともいえるこの状況なら尚更だ。

俺は今更ながらに自分の言ったことを後悔していた。

確かなのはと話をしてくれるかと問われ、もちろん。と答えた。

ああ、答えたともさ。

だけどな、登校狙ってとか買物行ったら目聡く見つけてくるんだよ。

高校2年になったのに、彼女一つ作れない。

あんまりだろう：勉強自体は何の問題もないし、卒業も学歴も問題ないが、このままでは灰色の学校生活と言うものになるんじゃないのか？

2度連続しての灰色の学校生活、ある種、戦慄を覚える。

引き継いだ冒険者としての記憶を抜けば（と、言うかFFXIは全年齢適応のためピクシクな感じは一切なかった）、年齢Ⅱ彼女イナイ歴となってしまう。

社会人になってからは仕事と趣味に忙しく、その後は病気で入院とくれば付き合うこ

ともないのは当然だが、それでも今の状況を甘んじたいわけじゃない。

「と、言う事で突然だが、彼女を作ってみたいと思う」

「何を言ってるんだ、信濃？ いるだろう、態々、弁当まで作ってくれる可愛い彼女が」

突拍子もない発言なのは重々承知していた信志に、あきれたような声で突込みをしてくるのは、同じく風芽丘中学からの転入組である大阪 虎勝（おおさか とらかつ）である。

「小学3年生を彼女にしている高校2年つて犯罪だろうが……そもそも、彼女は彼女ではなく懐いている近所の子だ。俺がほしいのはステディな女性だ！」

「んなの、美由希ちゃんだっけ？ あの子狙えばいいだろう！ 何が不満なんだよ！」

「全部だ！ あ・の・な！ 俺がほしいのは平穩無事に過ごせる毎日であって商店街に行くたびに殺気を浴びせられる日々じゃないんだよ！」

そう、原作と変わってきているのだ。

高町なのははこちらと積極的に関わりを持つとうと動き続けている。

高校に入ってから、もう一度高町家への入居を進められたが断り寮生活を続けているのだが、週に一度程度、家の管理維持の為に帰るとタイミングを逃さずなのはが弁当を作ってもってくるのだ。

そのためなのかなんなのか、嫉妬なのか、高町兄から商店街に入るだけで殺気を向け

られる事態となつている。

積極的にかかわりを持ちたくない俺は、先ほどの大阪虎勝の進めもあり、野球部へ入部し接触の制限に成功した。

が、今度は試合に顔を出すようになったのだ、しかも、親友たる月村すずかとアリサ・バニングスを連れたトリオで。

なのはの過剰なアタック?により、おかげで周囲にはロリコン疑惑がかけられている有様:しかも、なのはは俺絡みになると頑なに言う事を聞こうとせず、最近では会話も減ってきていると美由希が愚痴を漏らしていたのを以前、捕まった時に聞いた。

「ったく、いい気なもんだなあ、レギュラーのかかった大一番が近いってのに」
「なるようにしかならんだろう?」

「まあ、そうなんだけどよお:まあ、レギュラーとかになれば彼女もできるんじゃないのか?俺としてはそろそろ、お前にも野球に集中してもらってだなライバルとしての活躍と言うかだ:」

何気ない、虎勝の一言に俺は雷に打たれたと思うほどの衝撃を受けた。

「……って聞いているのか?才能はあるはずなんだからやればお前だってレギュラー入りも十分あり得るんだぞ!」

横でわめく虎勝にも彼女はいる。

お約束のマネージャーという存在がそのまま、彼の彼女なのだ。

若干脳筋気味ではあるが特待生として鳴り物入りで入り1年のことからレギュラー入りしたこいつには才能があるのだろう、ピッチャーとしてプロも注目しているらしく、そんな彼に『中学時代から運動能力に目をつけていた』と推薦された俺も期待はされていたのだが必要以上の注目は嫌い、ある程度の補助金が出る程度の成績を出すとそれ以上はやらなくった。

が、こいつだけは何か感じたのか俺に真面目にやれと言ってくる。

話が逸れたが、体育バカのこいつでも彼女ができたのだ、うまくすれば俺にもできるかもしれない。

「そうだな…気合い入れてみるか…」

「お、ようやくやる気になったな、この野郎！よしよし、本気になったお前と久々の勝負ができるな」

「良いだろう、彼女を手に入れるための布石にしてやるッ！」

そんなことを言った放課後……。

「特訓だあああああ！今度は打たせないボールを投げてやるからなああああああ
!!」

と、土手を走る彼とその彼に甲斐甲斐しく付き合う彼女の姿に、打ちのめしたはずの

紳士のほうが逆に打ちのめされるのはまったく、無関係な話。

淫獣イタチが空から降ってくる日がいつなのかなんて当然、覚えていない俺はいつ来るともわからない脅威たる管理局から逃れられるべく、魔法を扱うジョブを外し相手の良い忍者や探索として獣使いとサポートに踊り子を入れて日々を過ごしていた。

忍者は盾ジョブ・タンクと呼ばれる種類に分類され、パーティを組んだ場合に敵からの攻撃を引き受ける役を指す。

思い浮かべるなら本作品でも有名なナイトや他のゲームなどでも出てきそうな守護騎士、ジエネラルなどをイメージしていただきたいが、この忍者の最大の特徴として避ける盾役と言う役割を担う。

守る以上はどうしても被弾するのだが、忍者においては回避性能の高さと忍術の一つが反則じみた回避性能を誇るモノがあるため盾として可能になった。(運営もその運用は想定していなかったそうだ)

『汚い、さすが忍者、汚い』などと言う黄金の鉄の塊が残した言葉もあるが、それまでまっとうにナイトを上げてきたものからすれば、まあ、気持ちには分からなくはない。

踊り子は踊りに様々な効果を持たせている。回復であったり、支援であったりと多種多様であり中衛としての役割を果たす。こちらは種類も多く複雑なため説明は後日に

改めるがどちらもMPに依存しないスタイルを確立したジョブで万が一、ユーノを見逃してアースラが訪れても魔力感知はされないよう頭をひねった結果でもある。

また、獣使いはペットの使用が可能な二体一身で戦うタイプのジョブでフィールド上にいるモンスターを操ったり、エサで一定時間ペットを呼び出しPCとペットであるNPCを操作するテクニカルジョブといえる。

最大の利点は敵に合わせたペットの選択やペットミサイル・ファンネルと呼ばれる使い方などなど柔軟性に富み、こちらではより細かな命令を送ることができていた。

最大の懸念であったFFXIにおいてレベルがカウントストップの状態になった時に得られるボーナスをMPに割り振っていたため、多少のMPはあるが補正用の装備で打消し、ほとんどない状態にすることに成功している。

しかしながら、なぜ、こんな説明を長々とやっているかと言えば、現在進行形で謎の物体に追いかけてられているからとしか言えない。

魔力もない、気配も消しているにもかかわらず、部活帰りでコンビニによって察へ戻ろうとした矢先、目の前にこいつはいらっしゃった。

『グルアアアアアアアアアア!!』

一見すると何か毛玉のような、布かぶったゴーストっぽいへんてこりんな生き物がこちらめがけ襲い掛かってきたのだ。

「おいしいおいしい!?!」

なに、こいつ、トリガーNM的なモンスターじゃないの!?!てか、ジュエルシールドだろ!?!おとなしく淫獣おそつてろよ!

などと心中で叫ぶがそんなもの、虚しいだけである。

へモーグリ! 装備変更、忍者のC-5を頼む!へ

へくぽっ!?!ちよつと待つくぽへ

耳に付けたパールの付いたイヤリングに叫んだ俺は決して怪しい精神構造を持つ人間ではなく、これが家にいるモーグリと連絡をやりあうための手段なのだ。

装備やアイテムの殆どは持ち運びの利くものではないため、モーグリに相談したところこのイヤリング、(LS リンクシユル)を介してモーグリに連絡すれば装備変更が可能と教えられていただけに過ぎない。

いや、でもさ、いきなり体が光に包まれて気が付けば忍び装束になっているのは良いんだけど…名実ともに不審者だよ、これ…。

民家を避け公園に逃げ込むと向き直り、忍刀を手にする。

ハイエンドコンテンツを攻略し、虐めの様なDSクエストをこなすことで手にできる最後の最後まで愛用し続けたエンピリアン装束とよばれる装備品に身を包み、地面に足を突き立て加速していた体を滑らせながら追いかけてきたモンスターと対峙する。

空中から落ちてきた物体は地面と衝突すると石つぶてを巻き込んであたりをまき散らす、これ自体に対し威力がないのか装備が優れているからなのかは分からないがダメージとなることはない。

忍刀・真神無と忍刀・天人鳥を構え、状況の把握に務める。

ここで、これを討伐するのは可能か？

なのはが現れた場合の接触はどうするか？

いま、退治していることがどこまでイレギュラーなのか？

また、この状況が今後、フオロー可能なものかそれとも巻き込まれる概算が高くなるのか？

それが分からない、故に手が詰まる。

しかし、相手はそんなことを察してくれるわけもない。

『グルオオオオオ』

手を出してこないこちらを弱腰ととったか、塊が獣のような雄たけびをあげ突進してくるのをバックステップだけで避けると、勢いを殺しきれなかった塊が木々へとぶつかるがダメージらしいダメージは入っていないように見える。

分類にするならゴースト系か？物理攻撃はあまり聞かなさそうだな——

伊達にゲームを長々としていたわけでも、追体験で気が狂いそうな痛みと経験を積ん

だわけではない、戦闘用に頭を切り替え冷えた頭で敵を滅することに集中する。

「遁甲：空蟬の術 壺」

その言葉を口にする、手にした人型の紙を翳し放り投げるとぼんやりとした影が体にまとわりつくのがわかる。

忍者の非常識なまでの回避性能を一助した魔法：いや、忍術、空蟬の術は体に幻影をまとわりつかせ攻撃が当たるのと同時に幻影が身代わりとなるモノで広範囲無差別殲滅なものでもないかぎりには絶対の回避性能を誇る。

「こや、参る」

腰だめに構え、引き絞った足を全力で踏み出し、一足で塊の足元にたどり着くと二の足で飛び上がり目玉と思しき部分に刃を突き立てると塊が苦悶の声を上げる。

「暗闇の術 式」

触媒を手にし念を込めると闇色に染まった煙が獣の周りを覆い隠し視界を遮るように幕を張る。

膜が張りきつたのを確認すると腰を落とし足元を切りつけるとそのまま、足払いをかけ傾いた体に返す刃を突き立て切り裂き蹴り飛ばす。

ゲームでは同一動作にしか見えなかったその動きは、知識の中で目まぐるしく動く戦況を判断し体を動かしていた。

文字通りの経験は彼の地となり肉となつて生きていたのだ。

塊から出される触手を片手で弾いて受け流し、もう片方で触手を根元から断ち切ると懐に潜り込み二回、三回と連撃をたたき込む。

「火遁：参」

触手をあらかた切り終えると懐から忍具を取出しそのまま、その取り出した腕ごとモンスターの口の中につつまみ、モンスターが腕ごと噛み切ろうとした瞬間、忍具が爆ぜた。

ガスに引火するように燃え広がる火炎はモンスターと言う塊を飲み込み、貪欲に食らい尽していき動きを鈍らせたモンスターが、最後に見たのは漆黒に輝く忍刀が己の目に突き刺さる瞬間だった。

「臨……」

飽和攻撃を受けたモンスターは、魔力と言う己の肉体の維持限界を超え霧散させ雪が風に散らされるが如く消えていく。

残ったのは源凶たるジュエルシードただ一つのみ。

静かに彼は腕を組んで考えた。

倒してしまった――

いや、どうしよう？判断基準のつもりで戦ったらあつさり勝てました。

カンスト（カウンターストップ）してるレベル99の忍者なんだから当然茶当然なんだけど、これ、いくつか集まると世界滅ぼせるぐらいの出力あるんだよね？

向こうでそんな無茶ぶりしてくる敵なんて、そりやいたが、こんなに弱いはずがない。べひんもす様もといベヒーモスやアダマンタスのほうがよほど強敵だ。

などと彼は混乱しているが、この結果、割と順当なものであったりする。

考えても見てほしい、MMORPGとは言えハイエンドコンテンツやミッションといわれるメインストーリー系には神と名の付くものやら魔王を初め、世界を壊せそうなレベルの人外がわりかしゴロゴロしていらっしやる世界だ。

猛者と遣り合い勝ちを拾ってきたPCの中で、割とやりこんで軽い廃人クラスだった彼が負ける道理などない。

そんな事にも気が付かずため息一つもらすとジュエルシードを手取るべく手を伸ばした瞬間、公園に結界が張られ、閉じ込められたのを察知するとその場から、飛びのき素早く身を隠す。

「物見の術…遁甲の術！」

手元から札を二枚取出し、音と姿を隠すのではなく消す。

熱源探知などをするものでもない限りばれることはない。

それでも木の上に身を置き、しばらく様子を伺うと動きがあった。

なのはとユーノが姿を現したのだ。

まだ、なのはは魔王として覚醒していないのかユーノがレイジングハートを持っており喋っている様子はない。

「あつた、あれだ！」

ジュエルシードを見つけたユーノが叫ぶようにして声を上げるとなのはが目を丸くして見せた。

ジュエルシードが再び動き始めたのだ。

霧散させてから時間を置きすぎたのが原因なのか、元々活性化しているため何度でも復活するのは分からないが、再び塊のような体を手にしたモンスターが月に向かって吠えるとなのはたちを見据え、警戒するようにじりじりと動き出した。

無印期

渴望

タスケテ——

誰か、助けテ——

誰力、聞こエマセンか——

ノイズの様な音を聞いた気がした私は目を覚ましました。

男の子が不思議な塊と戦っている夢、時計を見ると針は6時30分を指しているのに気が付いて、知らないうちに二度寝をしそうになっていた私は飛び起きた。

髪を部屋の備え付けの鏡で梳かすといつも髪形を整える。

桃子さんが何度か髪形を変えたら？と聞いてきたがあの人が褒めてくれた髪形を直す気はない。

以来、桃子さんに髪を梳かしてもらうのを止め、自分でやるようにした。

自分で出来たほうが、桃子さんの手を煩わせないですむからだ。

パジャマのまま、台所に降りると朝食の準備を始める。

あの時、あの人が『おいしい』と言ってくってから料理をずっと勉強してきた。

刃物を使うのにいい顔をしなかった士郎さんだったけど最近、手も切らないし手馴れてきたら何も言わなくなった。

あの人が練習試合や家に帰ってきたときだけ、あの人にお弁当を作ってもっていく。それが何よりの楽しみで、困った顔をしながらもちやんと食べて感想やアドバイスを聞くと事細かに答えてくれる時間は私にとっての何よりの楽しみだ。

みんなの分のご飯を作り、できればあの人にいつもお弁当を持っていけたらと考えるが、我が儘は言つてはいけない。

我が儘を言うにあの人たちは困った顔をする。

あの人みたいに何をしてくれる訳でもなく、ただ、やめるように言われる。

イイコダカラガマンシテネ——

そうやって、みんなは私にとって魔法の言葉を使う。

その言葉を使われると、私は人形にならないといけない、一人はとてもさみしいからお弁当を作り終えるころ、桃子さんは翠屋から、ほかのみんなは道場からリビングに集まり朝食を食べはじめ。

時間にして7時30分ころだ。

私は一足先にご飯を食べ始めている。

「おはよう、なのは、いつもごめんね」

「ううん、気にしないで桃子さん」

最初は私が作ると、桃子さんは言っていたがいつからかこの状況が当たり前になった。

「おはよう、なのは…ううう、私が作ればよかったんだけどなあ」

「美由希さん、おはよう、無理に作らないで私に任せてね？」

「そうだな、お前が作ると食えるものも食えない。…が、つらいならいいんだぞなのは？」

「自分で作りたいから作ってるんだから、気にしないで恭也さん」

ひどいよくと掛け合いをしながらリビングに入ってくる二人を迎える。

美由希さんは味覚やセンスが壊滅的で、恭也さんは何を思ったのか武道にのめり込んでいるらしく、つらいなら、と言うのももの翠屋のほうで手伝いこそするが家では基本的にあまり、台所に立とうとはしない。

翠屋の厨房ならたつの、と、不思議に思うけど、言っても二人を困らせるだけだからそんなことは口にしない。

「おはよう、なのは。娘の美味しい朝食を食べられるなんて幸せだなあ」

「おはよう、士郎さん。おかわりあるからたくさん食べてね」

どうやら、私の料理を食べると幸せになれるらしい士郎さんが最後に入ってきて朝食

が始まる。

あら、あなた、口に——美由希、リボンが曲がってる——すまないな、桃子——
—え、どこどこ？ 恭ちゃん、なおしてくれる？——もう、貴女ったら、子供たちが見
てますよ——たく、おまえはてのにかかる——

二組のペアがお互いに我が儘を言っても苦笑いをしながら受け入れてくれるこの状
況で、私も受け入れてもらえるのだろうか、何度思っただろう？

何度か、口にしたことがある。

僅かなりの希望を持って、でも、みんなは苦笑いをするだけで、指摘するだけでして
くれなかった。

私は、この『家族』の輪において浮いている…。

「ごちそうさま」

静かに、そう言つて食器を下げる。

みんなは、私の一言に適当な一言をかけると、二人の時間に戻っていく。

私はいなくても、きっと変わらないのだろう。

部屋に戻ると窓に飾つてある小瓶を抱きしめ、そつと元の位置に戻すと帽子をかぶ
り、瓶に向かつて一言だけ呟いて家を出掛けた。

行つてきます、お兄ちゃん——

たまに、あの人は家に帰ってきて掃除をして次の日は歩いて学校に行く。

そんなときは家に明かりがついているので、無理をしてもお弁当を作つてあの人と学校へ行くんだけど残念ながら帰ってきてはいないのを確認している。

小さくため息をこぼすとバスに乗り込み、親友の二人と顔を合わせ、挨拶をする。

「おはよう、なのはちゃん」

静かに微笑みながら挨拶をしてくれるのはすずかちゃん、月村すずかちゃんだ。

紫がかつた髪に透明感のある日本人らしい肌色、大和撫子と言ふ言葉がよく似合うであらう女の子で

「おはよ、なのは…その分だと、愛しの彼にまた会えなかつたみたいね」

少しからかうような言い方をするのはアリサちゃん、アリサ・バニングスと言ふダブルの女の子だ。ヒマワリのような金色の髪に白人特有の白さが際立ち、ビスクドールの様な完成したかわいらしさを持つ女の子。

「おはよう、二人とも…でも、アリサちゃん行き成り意地悪だよ」

「そうだよ、アリサちゃん。二人で応援するつて決めたでしょ?」

「ごめんね、なのは…でも今度試合行くんでしょ? 鮫島に言つて車を出してもらうから許して、ね?」

「も、また、アリサちゃんそうやってごまかす」

「あははは、ごめんてば〜」

「うふふふ」

とりとめない会話、物凄くほっとしてここに居ていいんだと実感する。

でも、私は二人に釣り合っているんだらうか？

二人は私に三人でいるからちようどいい。と言ってくれる。

不安になる私を支えてくれる。

だから、という訳じゃないけど、だから、安心して二人といれる。

願わくば、あの人と三人、一緒に入れることを心から願いながら、私はバスに揺られていった。

「将来の希望ってなに？」

お弁当の時間にアリサちゃんはその切り出した。

先ほどの社会の授業で気になったのだろう

「私は当然、両親の会社を受け継ぐことよ！」

宣言するアリサちゃんがまぶしく感じた。

いずれは、親の手伝いをはじめ小さな分野でいいので任してもらい、そこで自分の力

をふるいたい。

私は何をしたいんだらう？

私はもう、強く何かしたいと思わない、強いて言えば、態々、私立に通わせてもらった感謝はしないといけない。

その恩は何らかの形で返すべきなんだろとは思う。

「私は、工学系の勉強をしたいかなあ？」

すずかちゃんはお姉さんにあこがれている。別に変な意味じゃなくて、明るくてはきはきしていつも笑ってる。

昔はそんなに、感情を表に出すような感じじゃなかったらしいんだけど、それでも一生懸命、すずかちゃんを気遣って育ててくれたことに感謝しているらしい。

恭也さんとすずかちゃんのお姉さんが仲がいいので何度かあったことがある。

そんな二人がとて、私はうらやましい。

きつと、すごく贅沢なんだらうって思う。

けど、私の親は心配してくれていたけど、心配してくるだけだった。

話をしてくれるけど、聞いてくれなかった。

私を覗てくれるけど、見てくれなかった。

「なのはははどうなのよっ？」

いつまでも口を開かない私にアリサちゃんがきいてきた。

そう、私は――

「なにになりたいんだろう」

自分で作ったお弁当を突きながら、小さくつぶやいた。

「なのは？」

「大丈夫？」

二人が怪訝な顔をしながら心配して聞いてくれる。

そう、私は、何がしたいのかわかってないんだ――

「で、てつきり、あんたのことだからお兄さんのお嫁さんとかだと思っただけど？」

アリサちゃんが慌てた様にまくしたてるのを聞いて確かにとうなずいたすずかちゃんが続いた。

「そうだよね？私もそう思った」

確かに、それは私の希望。

あの状況から手を差し出してくれたあの人と一緒ならどんなに幸せだろうと思う。

でも、だ。

「きつと、お兄さんはそんな風に私を見てくれない」

美由希さんはもう、胸が膨らんで女性として成長している。

おつきい、小さいを別にしたってなのはと比べれば差は一目瞭然、中には私たちみたいな小さな子が好きでしようがない人がいるのは知っているけど、それはとてもいい事なのは、私でもわかる。

なにより、怖いのだ。

「もし、私がおつきくなる前に好きな人ができたらきつとその人と一緒になっちゃう」

それはある意味、当然なんだ。

私だつて、お兄さんと一緒になることを夢に見ない訳じゃない。

けど、お兄さんはもう17歳、私は9歳と言う年齢の差もある。

あの人は私が子供だから見てくれる。

私が大人になったら、もう見てくれないかもしれない、見てくれなくなったら…。

私は将来——

いつたい、何を見て、どう生きたらいいのだろうか？

魔王、目覚める。

そんなことない！

アリサが叫ぼうとして叫べなかった。

なぜなら、なのはが目に涙を浮かべている理由を理解していたからに他ならない。

確かに、なのはが達した結論が間違っている訳ではなく、むしろ、可能性としては一番高いものであることに違いはないのだ。

たかが年齢の差と馬鹿にすることなかれ、少なくとも今の時代では体裁が悪い。

彼が18になったとしても、なのはやアリサは10歳だ。

仮に女性の結婚可能年齢16歳になったとして彼は24歳となる。

何らかの仕事をしているものが16歳の嫁をもらって何の影響もなく、その仕事をつづけるか？

仮にうまく恋愛から結婚と持って行けたとしても彼女の年齢は間違いなく彼の枷となる可能性が高く、なのはがそれを良しとする訳がない。

最低限、適齢期に入るのであろう20でも彼は28、体裁を考えるなら24だがそのころには彼は32、結婚してはおかしくはない。

彼女の性格をアリサは好いているし、すぐかも同様だ。

できるなら彼女の力になりたいし、協力を惜しむつもりもない。が、どうにもできない問題も同時に存在している。

それが、時間だ。

これが社会人、例えばOLが働きながら話している会話であつたなら問題はなかつただろう。

しかし、彼となのはが出会い、なのはが彼を求め始めたのは今よりさらに前、よしんば彼が「彼女」を作らなければ芽はあるかもしれないが、そんなものに期待できるわけがない。

まだ、付き合っているという話を聞いていない、彼は野球や勉学に夢中のようだがいつまで続くとも限らないし、最近は野球で目覚ましい活躍をしているとなれば嫌でも異性の目につく。それぐらいのことはアリサとて重々承知していた。

「なのはちゃん」

アリサが思考のループに嵌っていると隣にいたさすがが立ち上がり、なのはに声をかけるとそつと抱きしめた。

「お兄さんはそんなにふらふら行っちゃう人なの？」

「そんなことない！」

「すずかの問いになのはは顔を上げて、強い口調で否定すると鈴鹿が安心したように笑った。」

「なら、大丈夫だよ？早く大きくなってなのはちゃんに夢中になってもらおう？」

「私に……？」

「うんっ！」

「すずかの言葉を理解できないと言わんばかりに問い返したなのはにすずかが満面の意味で答えた。」

「だって、なのはちゃんはこんなに可愛いんだよ？だから、早くおつきくなってお兄さんが無視できない位美人になってお兄さんを振り向かせよ？」

「そうよ！だいたい、あんた、あの人にお弁当作ったり応援してるじゃない！思わず手が出ちやうくくらい可愛くなればいいのよ！」

「すずかの言葉に後押しされるようにアリサがなのはを元気づけ、だいたいね、と言葉を続ける。」

「うちのパパとママだって似たようなものよ？パパにママが猛アタックしたんだから」
「最も、それはある程度の年齢になってからの話だったがそれは伏せる。」

「せつかく、立ち直ってきたなのはの勢いに水をかけるつもりなど、彼女たちにはない。」

「大丈夫なのかな？」

恐る恐る、といった風になのははふたりに聞くと、大きく頷くと異口同音に答えた。「当たり前！」

実際に彼女と結婚すると言う目がない訳ではない。

原作主人公と言うだけあり抜群の容姿に加え、家事を積極的に行ってきた経験値から料理もそこらの家事に慣れない新妻よりよほど上手く、彼の好みもよく理解している。

主人公：と、言うよりも『管理局』や『非日常』を引き連れさえしなければ、彼女が選ばれる目は確かにあるのだ。

そう、引き連れさえしなければ：の話ではあるが。

更によえば、信志は彼女を欲しがっているものの結婚相手を探している訳ではない。

そのまま結婚、となるのが理想とは思っているものの理想像を負いがちな年代に結婚をするつもりなど、彼に毛頭ない。

これは彼の前世の経験でもあるが、10代で結婚と言うのはよほど金銭的に恵まれた状況でもない限り、生活に制限がかかる。

たしかに彼はある程度、スキルを使って稼ぐことは出来るが必要以上にスキルを使うことはいらない注目を集めることにつながり、本格的に将来を決めるまではスキルの乱用を自粛していた。

そんな中、ついに物語が物語として動き出した。

〈だ■力、□IOすケテ〉

「え？」

ふいになのはが聴こえた声に足を止めると一緒に歩いて二人が足止めて振り返った。

「いま、何か聞こえなかった？」

二人になのはは聞くが、二人は首をひねるばかりで聴こえた様子はない。

〈僕ノ声が、聞こヨマスすか？〉

ノイズがかつているがはつきりと聞こえた声になのはは引き寄せられるようにふらふらと歩きだし、ふたりは一瞬、呆気にとられるもの、すぐになのはを追いかける。

「ああ、もうっ！どうしたのよ！」

「なのはちゃん、待ってよ〜！」

なのはの行き成りの行動に困惑し訳が分からないと追いかけるアリサとすずかは、さほどかからずしてなのはに追いつき、しゃがんでいる場所に何かいることに気が付いた。

「フェレット……？」

「かな？ 怪我してるみたいだけど」

「うん、こんなところでどうしたんだろう？」

アリサがボロボロの物体が動物……自分の知る知識の中でフェレットであることに気が付いて名称を出してみるとすずかも同じ種類に思い至つたらしく、フェレットの状態を気にしている。

先についていたなのはがそつと抱きかかえ上げると、僅かに目を開いたフェレットがなのはの手をなめると再び、気を失い倒れた。

「び、病院つてどこだっけ？」

「ええと、あつちにあつたとおもうよ」

「行きましょう、流石にほつとくのは寝覚めが悪いわ」

3人がワタワタとしながら病院に行くと大したことはない旨が説明され、アリサが鮫島を呼び出し料金を払おうとするもやんわりと断られている中、ゲージの前で会議が行われていた。

目を覚ましたフェレットがあたりを見渡している。

元氣そうなのはなにより、と喜んだのもつかの間、3人は深刻な表情で頭を悩ませている。

即ち――

「うちじや、流石に飼えないわ、犬に食べられちゃうかもしれないし」

「私も難しいかな、アリサちゃんじゃないけど猫がいるから」

「わたしも飲食店だから桃子さんに迷惑かけられないし」

犬猫が大量にいる家にフェレットを放つのは、このフェレットの精神衛生はもとより生命の危機にさらされかねない、なのははなのは家が飲食店である以上、動物はご法度である。

決定意見が出ないため、一旦、病院で預かってもらい後日、学校で飼ってくれそうな人を探すという方向で落ち着くと解散の流れになりそれぞれは帰宅する。

なのはは夕食もそこに切り上げるとフェレットの飼い方を、パソコンを使って調べる。

人に勧める以上、何も知らないで進めるわけにはいかない。と言うのが彼女の言葉である。

下調べも一段落したところ、また、声が聴こえた。

〈誰か、助けて〉

聞き間違えではない。

今回ははつきり聴こえた。

誰かが助けを求めている。

何度も何度も、助けを求めている。

なんて、うらやましいんだろう。

助けを求めることのできる声の主が、羨ましかった。

なんで、助けを求めることができるんだろう？

誰も——

助けてくれないかもしれないのに——

嫌われるかもしれないのに——

恨まれるかもしれないのに——

疎まれるかもしれないのに——

きつと、声の主はそれでも希望を持っていられる人なんだろう、それが、何よりも羨

ましく聞いてみたかった。

なんで助けを求められるのか？

声のするほうへ歩きなのははため息をついた。

やっぱり、誰もいない。

声の主も見捨てられたんだ。

だって、こんなに聴こえる声なのに、誰も動いていない、まるで聴こえないみたいに。ああ、でも、あの人なら来てくれてくれるのかもしれない。

だって、あの人は私も助けてくれた、なら、あの人が来てくれるかもしれない。なら、行ってみようかな？

これは、悪い子がすること、お巡りさんにつかまったらきつと、士郎さんも桃子さんも困るし、怒るだろう。

でも、良いと思つた。

なにか、すごく疲れた気がする。

最近、『疲れた』と思うことが多くなってきた。

緩慢な動作で靴を履くと、置き書きにコンビニに行くと言う旨を書き残し、家を出るとゆつくりと夜の街へと歩きだした。

何時からだろう？この『疲れた』と言う感覚に気が付いたのは？

寂しいと思つていた筈がいつの間にか疲れたに変わつていた。

てくてくとまだ聞こえる声の聞こえる方向へ、考えながら歩く。

ああ、そうだ——

私が人形にされる言葉を言われた後に感じるんだ——

どうすればいいんだろう？ 悩みながらもふと思う、その分、楽にしてくれる人がいる。あの人に会えればきつと楽になる。

だから、あの人がいるかもしれない声のする先へ行ってみよう。でも、いたのは怪我のしたフェレット。

〈きて、くれたの？〉

フェレットがなのはをじつと見つめるのを頷くことで肯定すると、フェレットは慌てたように身を正し器用に頭を下げた。

〈ありがとう…あなたには才能がある。僕にその才能を…力を貸してください！〉
このフェレットが必死になのはわかる。

けど、私はそんな力を求めてはいない、欲しいのは…。

欲しいのは、何？

私は、ナニガホシイノ？

〈大丈夫ですか!?!〉

行き成り、なのはの頭にフェレットの声が響き現実気に引き戻され小さく頷く。

〈さつき、通りかかりの人が襲われて向こうへ、公園へ逃げていきました。だから、お願いです、力を…力を貸してください！〉

誰、か、が襲われた？

「誰?どんな人?」

思わずフェレットを抱きかかえ上げ、問い詰めてしまう。

〈こ、こんな人です!レイジングハート、お願い〉

慌てた声でフェレットが胸もとの寶石に話しかけると宝石が輝き、映像を投影しだすとなのは今度はフェレットを手から落としてしまった。

「お、にい、さん?」

映像で襲われている人物は紛れもなく信志で、塊が繰り出す一撃をすれすれでさけるとコンクリートが砕け飛び散り、信志はその砕けたコンクリート片を投げ一瞬、ひるんだのを確認するやいなや走り出した。

「貸して」

〈え?〉

映像では軽い身のこなしで屋根へと掛け上げると公園へ走り去る信志とそれを追撃し、体の一部を放つ化け物が移し続けられていた。

「貸して、早く!」

〈は、はい!このレイジングハートを握って認証のキーワードを…わっ〉

我慢できずになのはが叫ぶとフェレットは慌ててレイジングハートを差し出そうとするが、その動作さえもどかしくフェレットごと宝石を抱えると叫んだ。

「力を貸して、早く！護るの！絶対に、失いたくないの！」

【stand by ready. set up.】

宝石は、少女の叫びに答えるように、彼女の内なる力を形にしていく。

ここに、魔導師が産声を放ち、桃色の濁流が柱となって誕生の喜びを表した。

魔を統べ、闇に舞う

目を開ければ、空に浮いている。

仮に、いきなりそんな状況に放り込まれて冷静に居られるだろうか？

少なくとも、現在の地球においてそのような環境に放り込まれば、混乱するのが普通である。

が、少女は違った。

あふれる魔力を己が力とし、意志による統轄を行い、デバイスの補助と流れ込む知識を元に今すべきことに必要な最低限度を読み込み、必要とされる公式を一瞬で編み上げ、呆然とその状況を見上げていたフェレットを回収すると公園に向かって飛び行く。

向かう傍らで、さらに必要な知識をデバイスから吸い上げ、爆発的に増えたマルチタスクを使い順次展開していく。

その姿は、異様の一言に尽きる。

力に目覚めて間もない少女が、魔法に慣れ親しんだフェレットの指示を何一つ受けることなく、デバイスを制御下に従え必要なデータを吸い上げると、バリアジャケット、飛行魔法、空気抵抗の除去、魔力の探査、周辺地形の読み込み、生命反応の有無、などと

言った複数の魔法行使を同時に行っている。

彼女が来ていた服は光に解かれ弾ける頃には下にバリアジャケットの下地が形成されておき、飛行魔法はその間もバージョンアップを行うことで安定性と飛行速度を飛躍的にあげていつている。

風の抵抗が強くなったかと思えば、突如として抵抗は弱まり、周りに魔力の幕が張られているのをフェレットが驚いていると抱きかかえられていた腕がバリアジャケットの装甲でおおわれていく。

それは、長らく魔法に携わってきた彼にとつて悪夢であり、この状況を打破する希望でもあった。

しかし、彼女の焦りの色は消えない。

「ねえ、さっきの塊の反応が消えたの……どういう事？」

公園の入り口から低空飛行で侵入し、魔力を負っていたのはが息を乱しながらフェレットに尋ねた。

フェレットは魔力の反応が消えたことに驚くが、まずはと封時結界を張り周辺の安全を確保すると魔力が一番濃いところへと走る。

実のところ、一番混乱しているのは彼で間違いない。

一助になれば儲けものと思つて、救難信号を発したところ訪れた少女は破格の才能を

宿し、既に少年の能力の外へと飛び出そうとしており、たしかに彼女の言うとおり、あれほど苦しめられたジュエルシードモンスターの反応が消失しており代わりに密度の高い魔力が周辺を覆い尽くしていた。

理解が追い付かない。それが彼の素直な感想だろう、が自分の役目を忘れた訳ではない彼は自身の役目を果たすべく魔力の一番高い地点へと足を向けるとそこに青く光る宝石が転がっているのを見て思わず叫んだ。

「あつた！あれだ！」

「やつぱり、本当にしゃべれるんだね……」

今更なのはの突込みにフェレットは、自己紹介もまだだったと思い至るがまずは封印が先決と、なのはに頼もうとしたとき、ジュエルシードは再び輝き黒い塊を纏って彼らの前に立ちふさがった。

「くっ、発動したのか!? まずはあれに……えっ?」

なのはに指示を出す前に彼女はすでに動いていた。

全身、いや、関節などの部分に桃色の羽をはやしたなのはがレイジングハートの宝玉の部分から魔力刃を展開させ、アックス上に広がる光をモンスターに叩き込むと体の各所に生えた羽から魔力流を噴出させ急機動を行い、上空へと脱出する。

開いた口が広がらないとは、このことを表すのではないかと言うほど口をあんぐりと

あけているフレットを前に状況は刻々と進む。

「消えて…」

周囲の分散魔力も巻き込んだ桃色の魔力光がレイジングハートの筒先へと集まり、彼女が号令のように吼え、その一撃を放った。

「なくなれええええええええ！」

【Divine Buster!】

直射型と分類される筈の砲撃魔法はモンスターに当たって尚、飛散することなく地面を貫く矛の様に放たれ、そのあとに残るのは強制的に封印状態に置かれたジュエルシードのみである。

「す、すごい…なんで、こんな辺境世界にこんな子が…」

【Sealing Receipt Number XXI】

驚いているフレットをしり目にレイジングハートはジュエルシードを格納し待機状態に戻るとなのははゆつくりと地面に降り立ち、再びフレットを抱えて走り出した。

「え? な、なんで?」

「だって、これだけのことしたんだよ!? すぐに警察来ちゃう、逃げないと!」

言われて周りを見渡せば、ボロボロになった遊歩道に碎け散った長椅子、池に浮かぶ

船の欠片、ちぎれた電線からは小さく火花が散っている。

小さくフェレットにも汗が浮かぶ。

確かに彼だけなら問題視もされないかもしれないがなのは違う。

間違いない、何らかの関与もしくは情報を知っていると考えられ疑われるのは間違いない。

理由はどうあれ、助けに来てくれた人物が現地の司法機関に捕まるところなど見たいはずもなく大急ぎで現場から離れていくのと同じく、現場に踏み入れた影があった。

影は周囲の状況に驚き、飛び散った破片や穿たれた穴の様子を伺いパトカーの音が近づいてくるなか、びたりと動きを止め、ある場所へ素早く針を投げる。

「!?」

不意に放たれた攻撃を息を潜めていた信志は避けるが、攻撃されたことで不可視と消音の効果が消え闇に溶けていた信志が姿を現すと影は深く腰を落として警戒態勢を取り出方を伺った。

「何者だ？」

返す言葉は硬く、殺気さえ混じっている。

信志は何も答えず刀を取り出すと軽くステップを踏んで柄の部分で影の腹を叩くと返す刃を振りかざす。

咄嗟に影が手にした二刀を交差させ攻撃を防ぐが次の瞬間にはその場に崩れ落ちた。「ふむ、見破り……されるとは思わなんだな、流石は魔王一族だ。スタンは有効つとこれは重要だな、メモしよう」

聞こえていないであろう影を見ながら呆れ交じりに呟き、その場から離れると、1、2秒をしないで影が目覚めますが既に信志がいらないのを察すると僅かに肩を落とすが警察官が影のいる方向へ寄ってくるのを察し姿を消した。

影は素早く走り、家へと戻ると出迎える二人の人影があった。

「父さん、なのはは!？」

「無事だ……が、状況が掴みきれん」

影のように動いてきた人影は家の明かりに照らされ、寄ってきた恭也に詰め寄られ厳しい表情を崩さずに答えた。

「どういう事？」

「不可解な現象が起きた……としか言えないな、戦いの気配がするに行ってみただが、さっぱりだ」

美由希が続きを促すがハッキリしない土郎の言葉に恭也の眉間に皺が寄る。

「父さんらしくないな……でも、そこで何かはあったんだろ？」

「ああ、戦闘痕が2種類残されていた」

「2種類? どういう事?」

状況を整理していく二人に美由紀が質問することで話を進めていく。

「一つは人の手によるものだ、踏込の跡や爆発と思しき痕跡があった。もう一つは…」

「もう一つは?」

「分からないんだ、どうやってあんなふうにやってのけたのか全く分からない」

状況を詳しく説明していく、少なくとも解析できるのは踏込や爆発物での戦闘だけで一瞬であんなに深々と地面に亀裂を入れるような方法は見当がつかず、何かの風圧を当てたような場所などもありもう一つの戦闘法が全く思いつかなかつたのだ。

「なにより、相当な手練れがいる」

「なに?」

「お父さんが言うつてことは、よっぽどだよね…?」

士郎の言葉に緊張が一気に高まる。

この3人の中で最も実力が高いのは、やはり士郎であり、その為、なのはが出た後に追いかける役を担った。

書置きにはコンビニとあったが、一度も夜中で歩くことはなく勝手に出かけることもなかつたのはがいなくなつたことに不安を感じた高町家の面々はそれぞれに分かれ

周辺の探索へと向かい、美由紀はコンビニ、恭也は家、士郎は周辺の探索に当たっていたが異常を察し、美由紀と合流すると二人に家に残るように伝え、公園へと向かったのだ。

結果、怪しい人物：信志と遭遇し一戦を交えるも意識を奪われ逃げられると言う失態を犯した。

決して、自身に慢心をしていたつもりはなかったがどこかに油断があったと後悔しながら説明していく。

「父さんの飛針をかわして逆に一撃入れて、尚且つ気絶させるほどの相手か……」

「どんな化け物……それ」

「神速を使ってこそいない……いや、使う余裕を与えてもらえなかったと考えるべきか、いずれにせよ、思っているよりも複雑なのかもしれないな……なのはにも帰ったら話を聞いてみよう」

更なる情報が必要と判断し、士郎は桃子に事の顛末をまとめて伝える為に家に入り、残された兄妹は門の前で待つこととした。

不重の想手

若干、と言うよりも盛大に騒がしくなってしまった街を横に歩いている二人：傍目には一人と一匹ではあるが会話を続けていた。

事情をユーノから細かに説明され、なのはは大凡ながらに理解し自分の置かれている状況を察する。

「つまり、私以外じゃこの状況に対処できない…のかな？」

「多分、難しいと思う。魔法じゃないとジュエルシードは封印できないし、なのは以外に念話に答えてくれた人はいないようだった」

なのはに答えるユーノはなのはに言っていない不安要素について考えを巡らせていた。

遭遇した現場は荒れおり、良くも悪くも誰かがあれと対処したのは間違いないのだが疑問が残る。

なんで、鎮圧したのに関わらず持ち去ることはもちろん、封印さえしないで離れたの
だろう？何より——

解決方法に謎が多すぎるのだ、残留していた魔力から一つはジュエルシードで間違

い、問題はだれがそれを行ったのかだ。

誰かが戦っていたのも間違いない、間違いないのだが魔力の反応が微量しかない。

仮にも発掘者と考古学者の端くれ、分析と解析力には多少なりとも自信がある、故に間違いないことが信じられないのだ。

生身の人間がジュエルシードの発動体を倒して退けること自体がありえない——

魔力が微量しかないと言う事は魔法らしい魔法が使われていないことを表している。だつた、どうやって？——

爆発痕はまだ分からなくはない、ここは管理外世界だ。

魔法はなくても質量兵器ならある、この世界や地域がどのような治安状態か、爆発物を初めとした兵器群がどれぐらいの入手難度かは分からないが不可能ではない。と思う。

が、それだけではジュエルシードの思念体は倒すことは無理だろう。なら、あれを散らした一撃の正体が理解できない。

『それなり』の威力を持つてなければならぬ一撃のはずだ。けど、そんなものが容易に携帯可能なのか？——

爆発物なら携帯も可能だが穴を穿つだけの質量か貫通力を持たせなければならぬ。しかしながら、穴の底には何も無い。と言う事は何かで穴をあけ、それを持って行つ

た。と言う事になる。

どんな武器だ？——

無論、彼には火遁だけでも十分可能ではあるのだが、知らない側から可能性を考えてしまえばキリはない。

「ねえ、ユーノ君？」

「ああ、なに？なのは？」

ユーノはなのはから声をかけられ、思考の一部を止め慌てて返事を返す。

「あれを止めないとみんなが危険なんだよね？」

「うん、こんな事態を引き起こしちゃった僕が言うのもおこがましいんだけど、力を貸してほしいんだ」

その為ならどんなことでもする。

比喻ではなく、本音から出た言葉なのだ。

「そっか、みんなが危険なんだ…なら、やらないと、ね？ユーノ君」

優しく頷いて見せたなのはに心から安堵するユーノは一瞬、見惚れ顔を赤くし顔をそむけて見せた。

「ありがとう、ユーノ君」

「こっちこそ、ありがとう」

だから、見えなかった。

「そうだ、護るんだ…お兄ちゃんを」

澀んだ昏い目で熱病に浮かされたように小さく呟く彼女が…。

危機感が募っていた。

時間がない、だんだん、会ってくれる時間が短くなっている。

なのはにとつて焦るのにはそれだけで十分、もしあの人に好きな人ができたらと思うと気がしじやなくなるのを抑えた。

迷惑をかけるわけにはいかない、子供の我侷だつて限度があるんだと自身に言い聞かせる。

でも、あの人のそばに居たかった。けど、そばにいる理由がないのだ。

それでも会いたいと願うのは恋する乙女なら当然とも言えるし、それをよく我慢できているとも言えた。

耐えて耐えて耐えきつた。

そんな中、彼女の自制心にヒビを入れるものがあつたらどうなるだろう？

何よりも簡単な問と答えが出る。

いとも容易く崩れるほかないのだ。

そうだ、お兄ちゃんを守るんだ——

そうしたら、きつとお兄ちゃんはもつと私を褒めてくれる。私を見てくれる。もしかしたら一緒に居てくれる時間がまた増えるかもしれない。

なのは途中で期待が膨らみ、幸せな未来が思い浮かべられる中、ユーノが水を差すように口を開いた。

「この世界で魔法は使われていないみたいだし無用なトラブルは避けたいんだ、出来れば魔法は極力ばれるのを避けたいから秘密にしてくれる？ 本当は、こうやってることも違法に当たるかもしれないんだけど……本当にごめん」

その言葉は、浮かれていたなのはの思考を冷やす水だったに違いない。

なのはとて、バカではない、その一言で軽々しく回りに言いふらした時の弊害が予想される。

この世界において魔法とは空想の産物であり、義務教育の行き届いた日本と言う国で言うなら状況にもよるが魔法とはペテンと同等であり、技術や出来事を指したりもする。が、この場合で魔法が使えると言って信じる人がどれくらいいるだろう？

あの人なら信じてくれるかもしれないが、同時に嘘つき、妄想家、精神的な部分での異常などを抱えている可能性を疑われるかもしれない。

確かに私なら、まだ魔法使いになったの。と言ってもお兄ちゃんなら頷いてくれるか

もしれない。けど、それが原因で離れられたら…？

だめ、私には耐えきれない——

「そうだね、ユーノ君…言ってくれてありがとう。私ももつと気をつけなくちゃ」

「そうだ、もつと気を付けないと些細なミスであの人に迷惑をかけたら嫌われるかもしれない。」

「たぶん、気に負い過ぎとあの人は言ってくれる。」

「けど、僅かでもその可能性があるなら、それは言うべきじゃない。」

「気にしないで、巻き込んだのは僕なんだ。僕にできることがあるなら出来る限り手伝うよ」

「うん、ありがとう。私も早く魔法になれるよ」

「でも、お兄ちゃんに魔法を見せたら信じてくれるだろう。」

「その時は、いろんなお話がしたい。」

「だって——」

「そこまで考えてなのはある『物』を思い出した。」

「ユーノ君、すぐに見てほしいものがあるの！」

「ユーノの答えを待たず、体を鷲掴みにし『グヘエツ!』と言う割と危険な感じのする悲鳴も聞かずに家へ走り出し、門が見えてきたところで人影に気が付き足を止めると向

こうから駆け寄くる。

人影はなのはの前に立つなり怒気を隠さずに口を開き言い放った。

「こんな時間に何をしていたんだ！なのは！」

なのはにとつて恭也がここに居ることは計算外で、頭が一瞬だけ白くなる。

「それにこのフェレットどうしたの？」

動きを止めてしまっていた間に姉の美由希にユーノを取り上げられてしまい慌てて、ユーノを返してもらおうと手を伸ばすがさらに上へと持つて行かれてしまう。

「美由希さん、ユーノ君を返してください！」

恭也に尋問されるよりも、美由紀に話しかけられるよりも、確かめたいことがなのはにはあり、優先順位など比べるまでもない。

有り体に言つてしまえば、急ぐなのはにとつて彼らは最早、邪魔者でしかないのだ。

「わく、かわいいい。でもこんな時間にどうしてこの子を持つてるの？」

「それより、こんな時間まで何をしていたのか教えてもらうぞ、なのは」

何より、失敗だったのはなのはとのコミュニケーションを取りたかった彼らは焦りすぎてしまったことだ。

この場合は、恭也はなのはを心配し情報を集めることに、美由希はなのはとの話を伸ばすことに。

それがなのにとって何よりのストレスになると考えることもなく、久しぶりに得たチャンスを生かそうと必死になり、本当に見なければならぬ相手を見なかったことにある。

一旦、間を置けばここまですれ違うことはなかったはずなのだ。

「……で。」

「え？なに？まつてよくもう少し触らせてよ。ねえなのは、このこどうしたの？」

俯き、喋るなのは見ないでユーノをかまい声をかけ続ける姉と、

「なのは！俯いててもわからないだろう！」

「……い。」

そのなのは見てもなお、強い口調で話しかける兄に、

決して悪気はない。

姉は妹とつながりを保ちたくて、兄は妹を想い、一緒にいてほしかったただだが。

「なのは！」

「心配したんだぞ、とりあえず、中に入って話を聞かせてくれないか？」

「……でっ！」

声を聴いて家から出てきた親も、今のなのにとっては障害に過ぎず、小声で呟き嵐が過ぎるのをこらえようと手をぐつと握りしめたとき、桃子がさりげなく言った一言で

限界を迎えた。

「なのは？良い子だから言う事を聞いて、ね？なにがあつたのかお母さんに話して？」
何度でも言おう、彼らに悪気はない。

桃子のセリフとて、特段悪いものではないのだ。

愚図る我が子にお願いし帰宅を促す。

普通の光景と言えるその一言、家に入ろうとしていたのを止めていたのは兄と姉でなのはが止めていた訳ではなく、この場合は彼らに一声かけてから移動するのがもつともなのかもしれないし、他に言い回しがあつたかもしれない。

ただ、一家はなのはを心配し、なのはしか見えていなかった。

いや、もしかしたら、『なのは』を見ていなかったのかも、『見えていた』のは不安や心配、『見よう』としていたのは初めて起こした不可解な行動とその理由解明かもしれない。

良い子、そう、なのははとても『良い子』、だから、こんなことするはずがない。

それがそこにいたなのはとユーノを除く一同の認識だった。

「そうだよ、恭ちゃん。こんなところでなのはを怒ってないで家に入ろう？なのはだつてわかつてるもんね？」

久しぶりになのは戸やり取りをして満足げにフォローする美由希も

「普段しないことだから気になるだろう！なのは、怒らないから教えてくれないか？」
末妹が心配でたまらず声を荒げたものの落ち着きを取り戻しつつある恭也も感情的になりそうになるその恭也をたしなめる姉も：

暗に良い子と窘め、

先に家に入ろうとした桃子と士郎も：

良い子だからと凡てを抑え込んだことに、

ある種、見ても見ていなかったのだろう。

「うん、わかった」

なのはの声に、感情と言うモノが抜け落ちていたのに誰も気が付かず、肩に乗っていたユーノだけが心配気に見上げてそのままついでに行った。

積み重ねを省みよ、汝らが咎は？

端的に言えば、誰も気が付かなかつた。

「一体なんでこんなことしたんだ」

と、問われれば

「怪我をした動物が外に歩いていたのを見て不安になりました」

簡潔にさつと返答してみせる。

「このフェレットはどうするつもりなの」

と、言われれば

「明日、病院に連れて行くつもりです。捨て子なら飼い主探すつもりです」

短く返して見せる。

人はなれる動物である。

環境に適応するという意味合いもあるが、状況の積み重ねがどんな以上であつてもそれを非日常から日常への認識へスライドさせる。

いつから、と聞かれてわかるものではない。

なぜなら、それは突然現れた以上ではなく、徐々に離れていく心を互いに認識しな

かった。否、出来なかった。

些細な変化はいつに間にか取り返しのつかないものになり、より修復を困難なものにしている。

異常が正常と認識してしまっている高町家にとって、何が正常となり基準になるのか
が既にあやふやになっている以上、正常への舵取りが出来なくなっている証拠とも言え
る事だった。

このやり取りで漸くユーノは、なのはとなのは以外の家族で温度差があることに気が
付いた。

割り切ったように感情を一切、抜きにして淡々と応えるなのはに以前のような面影は
もはや一切、見られることがない。

泣くことは勿論、笑うことも、苛立ちさえ感じさせないそれは唯の人形に等しい。
俯いてこそいるが、そこに感情の機微がないのだ。

不貞腐れている。

単純にそうやってとることができるし、現に美由希と恭也はそう判断して、何か話を
引つ張り出そうとしている。が、その通りと取ることができないのが二人いた。

桃子と士郎である。

「恭也、美由希、あとは俺たちが聞くからもう休みなさい」

不貞腐れていると判断した二人が下手に動く前に士郎が有無を言わずに部屋に返すと改めて、娘と向き合った。

「ねえ、なのは？」

「はい、なんですか？」

桃子は感情が含まれない声を桃子に返すのはを見て、いつからこうなったかを思い出そうとしていつからか分からないことに初めて気が付いた。

それは士郎も同様で、焦りが表情からにじみ出ており、それを見ている娘の目は無機質そのもの。

冷たい視線ならまだいい、そこにまだ嫌悪と言う感情が必ず混じっている。

その感情さえ混じっていないのだ。

「なの、は？」

「なんででしょうか？」

桃子の掠れた呼び声に顔を桃子に向けるが、それはまるで反応しているだけの人形にしか見えず、自分の子供に寒気を覚えた。

「いや、いい。なのは、疲れただろう。部屋で休みなさい」

「はい、わかりました。おやすみなさい」

士郎が絞り出すように言った言葉に頭を下げると部屋を後にしようとして足を止め

た。

「どうした、なのは？」

「このフェレットをどうしたら良いですか？家にも店にも迷惑をかけたくないですが放り出すわけにはいきません」

肩に居るフェレットを掲げるように抱いて見せると士郎たちになのはは指示を仰いだ。

なのはは彼らが保護者であり、養ってくれているのはわかっている。

彼らの要求する良い子でなくてはならない以上、動物を飼いたい等と言う訳にはいかない。

しかし、なのはとしてはこの弱ったフェレットを放り出すわけにはいかなかった。

ユーノを保護したのは自分で尚且つ、ユーノから魔法の情報を聞き出しお兄ちゃんを守らなければならないという最優先項目に加え、今すぐにも見せて意見を求めたい物があつたからだ。

むしろ、家の事情が関わらなければ思慮深い優しい子であるのはからすれば、ここで協力しないという選択肢は信志か家族に止められない限り存在しないのだ。

「そうね、なら、うちで預かりましょう？店に連れて行かなければ大丈夫だから」

衛生管理を預かる身としては失格と言われかねないが、店に行き仕事着に着替え、消

毒をしつかり行うならばリスクは大差なく、背景にテラスの部分でならペットの連れ込みは拒否しておらず、店内とてオープンテラスになっている以上は衛生管理に気を付けていけば問題ないと言う事情がある。

この場合、問題としたいのは糞、尿、毛やダニノミと言ったものが付着したりする点だがそもそも店に連れてきていない時点で問題となることはない。

それよりも桃子として優先したかったのはなのはとのコミュニケーションの復活、その一点に尽きる。

なのはの生まれる時期が悪かったとさえ、言い訳になるがまさにその通りだった。

店に連れて行くこうにも店が忙しく、かまうことができず家にいたほうが安全と判断し、母親と言うモノが必要な時期に傍に居れず、家族は父親のいる病院か店で手伝い。

仕方なかったのだ。そうしなければ、店がつぶれる危険があったし軌道に乗ったばかりの状態で疎かにするわけにいかなかった。

士郎も奇跡的な回復を見せたものの、一時的に落ちた筋力を取り戻すためにリハビリを行う。

到底、子供が付いていけるレベルのものではなく、こちらもなのはを置いていくこととなる。

ボディーガードをしていた経歴があり、少なかれ恨みを買ってしまったている士郎とし

ては、衰えてしまった筋力や技術を錆びつかせるは家族を危険にさらすと直結しており、こちらも手を抜くことができなかった。

尤も、大怪我を負って全盛期から大きく劣った相手に復讐をする価値ないわけではないが、それまで士郎が培った人脈から考えれば復讐するのはリスクだけが大きくリターンは少ない。

来て精々、三流や訳ありの一流ではあるが日本と言う立地に加え、幸か不幸か大企業たるバニングス、裏に名を馳せる月村の膝元で厄介ごとを起こす輩は少なく、いたところで下手に手を貸して自身が火傷をする可能性を考慮されることもあり襲撃者は驚くほど少なく、容易に撃退可能だった。

士郎とて、知っていなかった訳ではない。

さすがに月村は知らないがバニングスは知っている。

念には念を、と、考え、家族の負担……この場合はなのはの精神面を顧みなかったのは確かだった。

防犯措置や対策をしつかりしたうえでリハビリは行っていたが、なのはがそんなことを知るわけがない。

結果、今になってツケが回ってきている。

「いいんですか？」

「ああ、構わない。ただし、すっかり世話をするんだぞ？」

「分かりました」

用は済んだらすぐに部屋を後にするなのは見ながら士郎は一人思い耽る。

はたして、それは親子の会話であつただろうか？

子が親に言われることなく敬語で接するだろうか——

否、少なくとも高町家においてそんなことをする習慣はない。

子が親や姉を名で呼ぶだろうか？

否、居ない訳ではないかもしれないが、少なくとも他の兄妹が使わない以上、自分で

始めたことに間違いない——

何時からだろう、あの子があんな表情をするのは？

あの子の笑顔をいつ見ただろう？

愛想笑いなどではなく、心から喜んだ笑顔は見たのは——

「あなた…なのはは、また、笑ってくださいますよね？」

不安げに瞳を揺らした桃子が士郎を見ていた。

桃子もまた、同じような結論に達したらしい。

「ああ、子を笑顔でいさせるのは親の役目だ」

このままではあの子の親と言う資格は、ないと言つてもいいだろう。

だからこそ、背を向けるわけにはいかなかった。

当たり前なのに、それが今まで挑んできた何者よりも困難で難しいだろうと土郎は押し殺しながら嗚咽を上げる桃子を抱きながら、なのはの問題、正体不明の不審者、未だに遠くで鳴り響く。パトカー、何かが起きているのを感じ、桃子を抱いた腕がわずかに力が入った。

水の耀きに願いを

部屋にユーノを入れると戸を閉め、大きく息を吐いたなのはを心配そうに見上げるが声をかける訳にもいかず、どうしたら良いものかと、考えているとなのはがそんなユーノをしり目に窓際に飾ってあつた小瓶を手に取るとユーノの前に差し出した。

「これなんだけど、ちよつと見てもらつていいかな？」

差し出された小瓶を見ながらなのはの変化に戸惑っている。

最初に見たときは優しい感情豊かな子で、次見たときは一切の反応を拒絶した人形みたいな子、そして今は無邪気な年相応の女の子。

短い時間で様々な顔を見せる彼女は、ユーノから見て安定しているとは言い難かつた。

しかしながら、目の前のものを見てそれまでの考えがすぐに吹き飛び、小瓶に引き寄せられる。

「なの、は……これはどこで？」

何か分からない物体がそこにあつた。

できれば詳しく分析したい。

ユーノの本音である。

ユーノがここに来てから驚きの連続だ。

どうやったかさえ、不明な魔法らしき行使痕になのはの魔力、目の前にある物体。ユーノの知識欲を存分に刺激するモノに溢れている。

それがなんであるかは分からないが、これほど高濃度に魔力が封入されている液体を見たことがない。

「それって、やっぱり魔法で出来たものなのかな？」

空中にある魔力を水に溶かせば可能ではある。が、可能であるだけで実際に見たことはなく、どうやってそれをしたのかが分からない。

「多分、そうだと思う。ただ、どうやってこれができたのか、何に使用するのか、何を材料にしたのか、研究してみないとさっぱりわからない」

「これは、私の大切な人からもらったモノなの、願いがかなうって」「願いが……？」

願いをかなえるような魔力を持っているとは考えられない、が、なのはの表情に嘘はない。

「これが、本当に願いを？」

「うん、土郎さんの怪我をこれに願ったら治してくれたんだ」

怪我を治すような効果があったとは考えずらい、ただ、これが何かの反応を起こした後こうなったと考えるなら辻褄が合う。

単発式の祈祷型デバイスなら可能なのかもしれない。

「状況を詳しく教えてくれる？」

「えつと…」

説明を聞いていたユーノが顔色を、と言つてもフレット故に変化はそう見受けられないが視線が鋭くなっていくのは確かだった。

小さな願いをかなえる石：ジュエルシードそのものじゃないか!?

なのはが持ち得た情報と手元にあるジュエルシードの存在が一層、確信をもたらしてしまう。

石はなくなったそうだが、この高濃度の魔力が宿った瓶の中身を考えると一度だけの使いきりであったとも考えられ、ユーノの考古者としての興味をこれ以上にならないほどひきつけた。

一般人が持つには危険すぎる万能性を持っている。しかも、きちんと制御できるジュエルシードなど聞いたことがない。

「ねえ、ユーノ君、これをくれた人は私と同じ『魔導師』なのかな？一緒にこのジュエルシードを何とかできる人なのかな？」

驚きに固まっているユーノを持ち上げると、ユーノになのははそう問うた。

カニタンク!出撃ス! ~間劇~

噂、それは人が流す真偽不明な情報の塊。

その噂の一つが町を賑わせている。

為:いや、カニである。

皆さんのご存じの甲殻類に分類される生物—ナマモノ—で食べれば大変美味であり世界各国では様々な種類のカニが食べられている。

そんなカニだが、あまり大型なものはおらず、当然、子供クラスの大きさのカニなどいるはずがない。

はずがないのだが、この街に流れているのだ。

子供サイズの巨大なカニを森で見た。でっかい生き物が小川を逆上していった。等々ナドなど:キリがない。

そんな、知られざる噂の主の一日を追ったレポートである。

朝に呼び出される。

日もまだ出ていない早朝に僕はいつもの魚油汁にご主人に呼び出され、あるモノを探しに行くように命じられるとこっそり街に出てモノを探す。

モノはすぐ小さくて、どこにあるかわからないらしくなるべく人目の付かない場所を選んで探しているのだが、これがなかなか見つからないうえに人に逆に見つかつてしまう。

僕を捨て駒やミサイル扱いすることなく、本当にペットのよう扱ってくれるご主人にせめてもの感謝を表すためにも、頑張ろうと思う。

たとえ、水の中、草の中。

元々、水棲生物でもある僕らがこの近辺で探せない場所はない。

もしや、下水に落ちたのではと探してみたら残念ながら見つからず、がっかりしながらマンホールから出ると目の前に横倒しになった車椅子と倒れている少女、真っ向から向かってくるトラックがクラクションを上げていた。

目立つことはすると言われているものの、見捨てるのはバツが悪い。

なにより、ご主人も見過ごしたりはしないだろう。

素早く彼女と車椅子の前進むと爪を地面に突き立て力を籠め僕らの代名詞ともいえる

力を発揮して見せた。

シザーガード！——

爪に力が入り少しだけ大きくなるのを感じながらそのまま、トラックに右爪を突き立

て、左爪で地面に突き刺し勢いを少しでも削るべく抵抗を行う。

足に力を込め、地面に足のあつた位置がわかるほどえぐれた跡が残っていくが、きにしている余裕はない。

バンパーを貫いた爪に力を入れ少しでも車体を浮かせるために上に持ち上げようとしたのが良かったのか、少女の手前でトラックは止まった。

足に力を入れ過ぎてがくがくしているし、爪も少し欠けてしまったが護れた結果に少しホツとする。

爪で車椅子を傷つけないように起こすと倒れたままの少女をつまんで座らせると頷いてみる。

自己満足かもしれないが、倒れている少女を車椅子まで運び届けました。

と、浸っている場合ではなく、すごい勢いで逃げようとしたトラックのタイヤを一つ爪で切り取ると、ドアを突き刺してそのまま投げつける。

このまま、この不届きモノを警察に送り届けるのも騎士道としてはありなのかもしれないけど、そこまで目立つと流石にご主人に迷惑がかかってしまう。

しょうがないのでここで終わりと割り切り傷ついた体を癒すため、体を振り体に固定された藤籠からペットフード・イロプシンを取り出そうとするがちょうど割れた詰め部分引つ掛かり取り出せない。

ご主人によればジュエルシードモンスターなるNMが現れる可能性もある。

回復なしでは不覚を取る可能性も考えたと食べておきたいのだが困っていると先ほどの少女が籠から取出し差し出してくれた。

「これをたべるんか？ さつきはありがとうな？ えくと、かにさん？」

面と向かつてお礼を言われるとなんだかムズ痒くてペットフードを食べると泡を吹いて姿を隠す。

本来の用途とは違うのだがこれはこれでいいだろう。

腕を振り、さよならとあいさつをするとマンホールに身を隠しその場を離れた。

「なんやったんやろ…あれ？」

ものっせい勢いでトラック突っ込んでくるのに焦ったひとの一人が、うちの車椅子を倒していったんや。

嗚呼、うちもここで死ぬんやなあっておもったたら、目の前のマンホールからうぐらいの大きさのカニが出てきて、なんか体ふるわした思たら、トラックに突進。

なんでかしらんけど、爪にひびが入った程度で済んだ上に内が引かれる前に止めよつたん、これにはうちも夢かと思つたんやけど、呆然としていたうちを車椅子に座らせるのと、逃げようとしたトラックの前輪切り飛ばしてドアこじ開けた思つたら運ちゃん放りだしたんや。

信じられへんやろ？

うちもや！

んで、そのカニが何するか思たらなんか取り出そうとするやて、取り出せんとこまつつたから代わりに取り出して渡したらご丁寧に泡吹きながら手、振ってくれたんですよ。ちやうで、別に危ない薬も病気もちやうで？

なんか、えつらい、コミカルでかわいらしかったなあ。

泡とんでつたら消えてたけど、あれ、ほんまになんなんやろ？

——助けられた少女のコメントより一部抜粋。

追記、後日見ていた猫から報告書を受け取り、いる訳もない物体を見た必死に説明する使い魔たる猫たちに精神鑑定が必要か頭を抱えるおっさんがどこぞで確認されたらしい。

少女を助け、怪我也治って喜び勇んで探索の続きをするとついに僕は、ご主人の探していたものを森深くは木の根で見つけた。

こんなものを探していたのか、と思いつつも籠に入れ帰ろうとすると真つ黒な衣装に身を包んだ、変な子がいた。

「それを渡してください」

髪は金色、目は赤。

事前に連絡を受けていた『N a n o h a』ではないのは確かだ。

となると、略奪者となるのだが…。

「あの…、使い魔じゃないのかな？ どうしよう、アルフ」

なにやら、独り言を始めた。

大丈夫か？ この子？

ジュエルシードを籠に収めると、彼女に近寄り俯き加減な顔をのぞいてみるが驚いた顔をしているだけで、特段、変わった様子は見られない。

強いて言えば、顔色は悪いが許容範囲内だし医者でもないのに異常がわかるはずもない。

ああ、そうだ。

「あ、うん。カニのような使い魔なんだけど…まっつて、今、とりだそうとしてる」

なにやら、観察されているようだが気にせず目的の物を取り出すと彼女に差し出す。

「えーと、手を出せばいいのかな？」

ふむ、わかるのではないか。と思いつつご主人にもらった万能薬をわたす。これならどんな状態異常も大抵はばっちりだ。

もつとも、僕やご主人、モーグリ以外に効くかどうかなどは知らないが。

「ち、ちがうの、ほしいのはね、ジュエルシードっていう宝石なの…わかるかな?」

残念だが、それは渡せないのだ。目の前の少女がそんな恰好で街を歩かねばならない状況程度には、残念ではあるが、だ。

「ややこしいね、もらつちまえばいいじゃないか、こつちだつていそいでるんだし」

突如、後ろから聞こえた声が私の積み荷を盗ろうと手を伸ばしたのを気配で察すると爪を振り上げ、牽制を行いつつ離れる。

何をする!

威嚇を込めて爪を空高く突き上げてみるが、二人は固まっている。

「ねえ、アルフ、この世界のカニはこんな風に動けるの?」

「何処の世界にもこんな器用なカニはいない気がするよ、フエイト」

未知の動きに若干だが感情が前に出て目を輝かせる少女とそんな少女を見てうれしさ半分、脱力半分で答える女。

「ただ、と姿勢を低くする少女と拳を構える女、どうやら一戦交えねばだめらしい。

「せええええええ、ハアツ!?!かたつ!」

当然だ。私をなんだと思つて拳で殴つてきたのだ? バカか、この女は?

爪で腹を突き、返す刀であごを打ち据え交差した爪を居合抜きのように振りぬくと容易く吹き飛んでいく。

「どうやら、モンクタイプのようなだがまともにもやりあいたければ無想無念あたりでも持ってきてほしいものだ。」

「アルフ!?!」

鎌を手につ突っ込んでくるのは少女、どうやら暗黒騎士タイプのようなだが踏み込みが足りない!

刃の部分を鉄で受け、あいた片手で鎌の柄の部分を切り取る。

ビツクシザー——

一時的に限界を超える力を発揮した爪は鎌の柄を切断し、もう一撃を加えようとしたところで思ったよりも素早く後ろに下がり回避されてしまった。

地味に厄介な相手である。

ついでに空を飛んでいる。

なんとも、卑怯だ。

「な、なんなんだい……あれは?」

「分からない、けど……つよい!」

僕から言わせてもらえば、浮いていることのできる君らのほうがよほど脅威なのだが気が付かないのだろうか?

更に言えば、切断したはずの鎌の柄がくっついていいるのも理不尽だ。

「けど、これならー」

言うや否や、少女が杖を振りかざし魔法陣が展開され穂先が触れた瞬間、

Thunder smasher——

稲妻が迸り、僕を貫こうとした。

ここで、ミソなのは貫こうとしただけで貫けなかったのだが。

何故か?

僕がレジストしたからに他ならない、先ほどの少女から逃げるのにはったバブルカーテンも助けになっているに違いない。

やはり人助けはするものだ。

「ウソ…」

「そんな、なんなんだい、あれは…」

などと呆然としている少女をしり目に私は再びバブルカーテンを張ると、その場を後にした。

追記、あとでバルディッシュの映像記録でてきたかにさんを見てとこその大魔導士さんは生命工学書を一から見直し始めたそうです。

厭う意思、無ければ水は低きに流れり

どうなのだろう？

こう言ってはなんだが魔導師が管理外世界にいることが珍しくはなく、違法魔導師は元より、フリーの魔導師も少なくない。

原因と言うのは、昨今の魔導師の不足にある。

高ランクの魔導師の数は減ってきている…と、言われており調べれば調べるほどその推測は正しい事がわかる。

二大勢力として名高い時空管理局、聖王教会は元より民間企業においても勧誘は多い。

中には強引な勧誘やむしろ脅迫と言っているいいものも多く、そんな勧誘合戦を嫌ってか雲隠れするものも少なくない。

なのはの魔力などもそういつた勧誘を避けて来た祖先の血が還ったのではないかとユーノは推測していた。

ユーノが管理局に未だに管理局に連絡しないのも、なのはの魔力量を考えてのことだ。

恐らくは彼女は管理局に勧誘されるだろう、間違ひなく。

最悪、有無を言わずに連れて行かれる可能性だつてあるし、拒否をしたところで他のところから勧誘がくるかもしれない。

正直、向う見ずに救援を要請したのは反省している。まさか、何も知らない魔導資質のある人間が来るなんて思つていなかった。

予想外で言えば、正体不明の何者かが何らかの方法で対処をしているのもユーノの混乱に輪をかけている。

判断材料がかけてる、それも致命的なぐらい――

ユーノがまず思つたのは現状の危惧感、情報が足りないのにそのわずかな情報に左右されている自分たちの立ち位置は危険すぎた。

目の前にある液体には確かに何らかの魔力を込めているのは疑いないが、それ以外のことが何一つわかつておらず、願いを叶えるよう祈るとこうなりしかも願いはかなつたと言う。

一見して、確かにそれは願いをかなえる願望機のように思えるが果たしてそれが本当に役目を果たしたのか？

仮に叶えることができるものだとしてそんな貴重なものを渡すだろうか？

リスクのほうも気になる。

ジュエルシードと言う、未だに到達できていない高圧縮魔力収納技術と歪みながらとはいえ、魔力資質のない生物にでも容易に発動できる祈禱型デバイスのある種、完成形に近い形を有しこれにまだ、世界は追いついてはいない。

そんな貴重なものをホイホイ渡すとは考えずらかったのだ。

驚きはした、が、考えれば考えるほどなのはの言い分にはおかしな点が目立つ。

ここでユーノは2つの決断を下した。

仮想魔導師と思しき人物への接触と偵察、そして、管理局への連絡通報である。

なのはが魔力に目覚めてしまったのはユーノの責任であり、緊急回避とはいえ時空管理法に引っかかる恐れがあり、そうなってしまったえば彼女の今後に差し支えるのは明らかだ。

管理局が来るまでの間は探してもらい、接近した時点では魔法の使用を控えてもらおう。

このままでは違法魔導師さえ集まってきそうだが、ロストログアの重要性・危険性を考慮すると既に向かってきている可能性もある。が、こちらからも救難を出すことで至急性を高める。

これをもとになのはのいう人物のもとへ向かい、交渉を行う。

仮に魔導師や知識のある者なら話位は聞いてくれるはずだし、管理局の干渉を嫌うも

のなら管理局に通報したいという情報は、価値を持つ。

違法魔導師なら早々に撤退するだろうし、フリーならうまくいけば協力してもらえ可能性があり、対応の限界を感じているユーノの助けとなってくれと言う期待も大きい。

「うん…：そうだね、なのは、明日その人のところへ案内してくれる？」

リスクなしに何か得られる状況ではない。

ユーノがなのはに頼むとすぐに頷いて見せた。

「もちろん！」

喜んでいるなのはの顔を見て、ユーノはなのはの年相応な部分を初めて見た気がして、少しだけほっとする。

ここは、何もかも、歪すぎる——

魔法のない世界で魔法が使える資質のある人間がおり、魔法のない世界で魔法としか思えない現象を起こせる人間がいて、

歪としか思えない家族がここにあり、歪としか思えない状況がここにあった。

だから、落ち着かない。

ユーノの人生経験は少ない、しかし、それでも今までの経験から十分すぎるほど警告が出されおり、この先の事を不安に感じ始めてた。

流されてるなあ…最近。

率直な感想である。

彼女は欲しい、喉から手が出るぐらい。

前世で彼女がいなかった訳ではない、が、欲しいものは欲しい。

大切なことなので2度言った。後悔はない。

とは言え、若干流され過ぎな傾向が見られる。

これはよろしくない、まるで無理やりクエストを受け去られる冒険者の様な…ような

…？

今後、どう物語が進んでいくかが徐々に分からなくなってきた中。原作にのみこまれるのはよろしくない。

第一、俺と言う異物を混ぜて物語がきれいに進んでいくはずがないのだ。

異物を混ぜたまま、紙一重の道を歩かされた先にあるのは十中八九、破綻か、異物を正当化しての成立のみである。

無論、日々平穩を是とする身にとってあんな物騒な世界に行くのは御免こうむりたい。
い。

いくら、冒険者としての経験、記憶、知識を持って体験したとしてもそれとこれは話

が違ふし、今の生活を相応に気に入っていた。

どうする？

故に、信志は考え続ける。

最大の誤算はなのはだ。

彼女の境遇は理解していた。

いや、していたつもりだった。と言ったほうが正しいだろう。

子供の孤独を恐れ刷り込みじみたことをされた精神状況など考えるまでもない。

理解できている。うまく引き下がれると思うことが驕慢、『彼ら』…正確には『彼女』なら、驕慢に腐り落ちていくのを唾う事だろう。

一端を飲み込んだ身としては、そんなことは回避したい。

だから、次の手を打つことにしよう。

このままいけば、なのはは魔法に依存しない。

少なくとも、俺に依存しかけている以上、これ以上の放置は彼女が耐えられるとも思えない。

遅すぎる対応となってしまうたが、間に合う事を祈りつつ信志は今日もこつそりとキャリーを街へと放った。

「あと2つ、何とか見つけてくれ…海の水底にあるの以外でだ」

こくりっ！

気合いを入れ、鋏と一緒に胴体を傾き頷いていることを全身で表現しながら、キャリーは今日も早朝、霧の立ちこめる街をかけて行った。

為
|| || || 3